

釜を被ったシャーマン

近藤 喬 一

- 1 鉢かづき
- 2 副葬された銅鼓
- 3 腰坑の三種類
- 4 シャーマンの図像
- 5 夜郎と滇——西南夷の人々

1 鉢かづき (第1図)

貴州省博物館の梁太鶴は2009年12期の『考古』に「赫章可樂墓地套頭葬研究」という論文を公にし、これまであまり明らかでなかった戦国晩期～西漢早期にかけての夜郎の墓葬の風習ではないかと思える套頭葬の実態をかなり明らかにした。在地の人々の墓と思える乙類墓の中に1割弱の套頭葬と呼ぶべき埋葬形態のものがあり、三種類の形式があるという。

① 墓主の頭にだけ釜を被せるものが276座の乙類墓中22座を占める。被せられた釜は鼓形銅釜12件、その他の形の銅釜3件、鉄釜6件、銅鼓1件（M153号墓、楊勇¹の第三期、漢武帝西南夷を開く以後）である。

② 墓主の頭に器物を1件被せるだけでなく、足も1件の器物で覆う場合が2座墓ある。M274号墓（第三期）では頭と足のいずれもまる底の大銅釜で覆い、同時に墓主の顔面を1件の銅洗で蓋をし、さらに右臂の上には2件の銅洗で蓋をし左臂の外側には1件の銅洗を立てかけている。M58号墓（第三期）では頭に立耳銅釜を被せ、足は鉄釜を被せている。

③ 墓主の頭頂を1件の器物で覆うと同時に足部には1件の銅洗を敷く。わずかにM273（三期）の1座墓。頭を覆うのにはまる底の大銅釜を使い、右臂下には銅洗を敷き、左臂の外側には銅洗を立てている。

以上のような興味深い論文を読んで、遺骸に被せるという意味で西周以后、玉衣を含めると東漢代まで用いられた綴玉覆面か東北地区の布袋をすっぽり被せるあり様²を考えた。しかし銅釜を頭に被せるというのはどちらかというとき、小さい頃に読んだか聞いた鉢かづきの話の思いださせた。室町時代に編纂された『御伽草子』³に鉢かづきの話がある。長谷観音の信仰篤かった母親は死にわかれる直前、13才のまな娘の姫の頭に手箱を載せ、その上からすっぽりと肩の隠れるほ

どの鉢をかぶせて亡くなった。継母にいじめられた娘はどうしても取れない鉢をかづいたまま、死ぬこともできずその国の国司の下働きとして働く。国司の四男が見初めて通い両親は言うことを聞かぬ四男に息子達の嫁くらべという試練を与える。2人で逃げだそうとした瞬間に鉢は割れ、手箱からは大量の金銀財宝が、割れた鉢のあとから現れた顔・形は誰もが驚くような美女であった。美男の四男と姫（長谷観音の化身だったという異本もあるらしい）は大和、河内、伊賀三ヶ国の受領となり幸せに暮らしたという。

鉢はどんな形のものか。それに関連する資料として鳥居龍蔵の1897年に調査した台湾ヤミ族の銀かぶとというものが参考になろうか。（東京大学総合研究資料館1991『乾板に刻まれた世界』－鳥居龍蔵の見たアジア－、写真図版3－3－1）によれば、一円銀貨を熱して叩いてのぼして作った銀かぶと（第1図）は蘭嶼に住む海の民であるヤミ族にとっては家宝ともいうべき男の正装に欠かせないものだという⁴。1902年7月から1903年3月まで9ヶ月間、西南中国を調査旅行した鳥居の足跡は武漢からはじまり夜郎の主要部分を形成する貴州省を横断し、雲南江川近くから北上して成都に達し長江を下るという大変な調査旅行⁵だった。彼の日本民族の構成要素の中に



第1図 ヤミ族の銀かぶと

「西南中国に住む広義のミャオ族のもつ文化要素、銅鐸、稲作、麻草鞋、横穴墓、高床家屋、文身、洪水兄妹婚神話など日本の基層文化と共通するもののあることを指摘した。」また先に行った台湾の平埔族の調査から彼らと現今（鳥居の「人類学上より見たる西南支那」執筆前后）、西南中国に住する苗族のある者とが人類学上密接な関係をもつて居るのではないかという疑問が生じたところである。⁶

鉢かづきは地方民間の説話から材を得、室町時代には編集されていたもの、ヤミ族の銀かぶとは鳥居龍蔵が調査した1897年頃のもの、可楽の墓葬で発見された銅釜を頭に被る風習は戦国末から西漢中晩期にかけてのものとして3者には何の関係もないことかも知れぬが、松村武雄が採集した『中国の神話と伝説』⁷の中に「竹から生れた男」として夜郎県の竹王の話がある。流れてきた三つ節のついた竹が河で洗濯している乙女の足の間にまつわり、その竹の中にいた男の子が後に漢の武帝から夜郎県の支配を認められ玉の印綬を授けられた。死後は神として竹王神という廟がつくられた。これは竹取物語や桃太郎の話ともどこか似通うところがある。西南中国の紀元前後にさかのぼる夜郎国と、いつの時代かはさだかではないが日本文化の古層に共通するものを持っていたことがあったということは諾い得るのではなからうか。

さて前置はそれぐらいにして、可楽の套頭葬で注意をひいたのは銅釜を頭に被るということが

最も関心をひくことであることは勿論であるが、1例だけ銅鼓を被った例があることである。日本の弥生時代の銅鐸とは異なり、銅鼓は墓に副葬されている例がいくつか西南中国や南中国では認められる。まず最初に墓葬の中での銅鼓の取り扱い方について検討してみよう。次にそれらの状況の中からこれだと思う現象をどう理解するのかについて考えてみたい。套頭葬そのものについて何か答えられるか迂遠な道を辿るように思えるが検討を始めてみよう。

2 副葬された銅鼓（第2図・第3図）

早い段階の銅鼓は墓に副葬されていることが多い。銅鼓の副葬状況について調べてみた。

① 雲南祥雲大波那木槨銅棺墓⁸ 石頭山で爆破して採石中、東西2座を発見。西側は全壊、東側を1964年3月から調査した。長方形竪穴木槨銅棺墓、家形鑄銅棺（長200、高82、幅62cm）。槨の一部は破壊されており出土した銅鼓1、銅釜1の配置状況は不明である。春秋晩期～戦国初期。李曉岑らによると戦国早中期。

② 雲南楚雄万家壩M1号墓⁹ 清龍河西岸の二級台地上、79座を調査。大墓13座のうちにM1、M23号墓は含まれる。竪穴土坑木棺墓で腰坑内に銅鼓1、銅釜1、銅羊角鈕編鐘6が納められていた。春秋晩期～戦国かとされる。

③ 雲南楚雄万家壩M23号墓¹⁰ 木槨木棺墓で槨底板（塾木）の下に倒置した銅鼓を2列4個置いている。春秋晩期～戦国とされる。近年の研究で戦国早期と決められた。

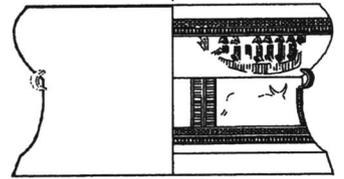
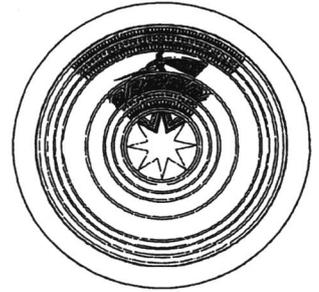
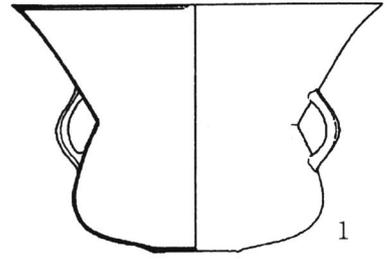
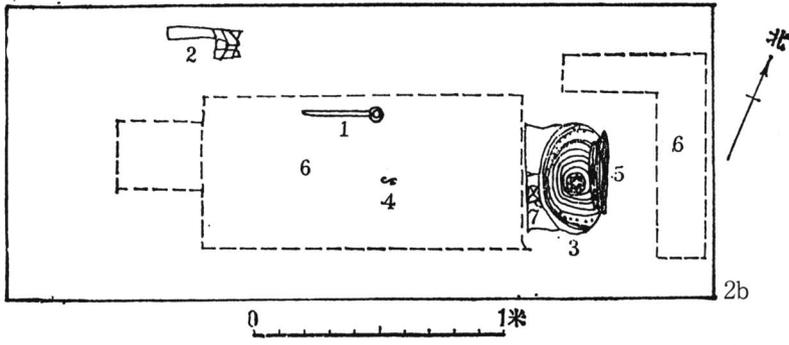
④ 雲南昆明呈貢天子廟M33号墓¹¹ 昆明市に近い滇池東岸2kmの天子廟内、1979年長方形竪穴土坑墓44座を発掘。墓室内頭部右角に銅貯貝器、足もと側に銅鼓1（鼓面を上）、左隣に銅鼎がある。戦国中期に比定されている。鼓面にはススがお厚く附着している。

⑤ 雲南昆明呈貢天子廟M41号墓 木槨木棺墓で槨蓋上に滇族とされる女俑銅杖頭（足膝下は銅鼓形）があり、槨底上左角近くに倒置した銅鼓1が、中に銅枕3、銅削などを納れる。隣に鼎1（鼎の3足には羽冠をつけた巫師の像が鑄成されており銅鼓形の上に乗る）。頭部上方に銅簞3、右下角に銅釜1がある。戦国中期偏晩とされている。

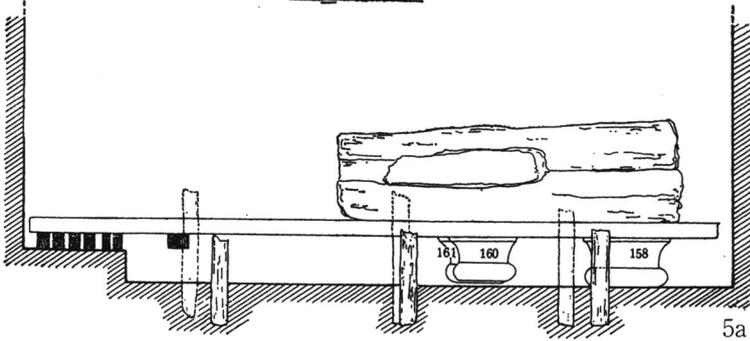
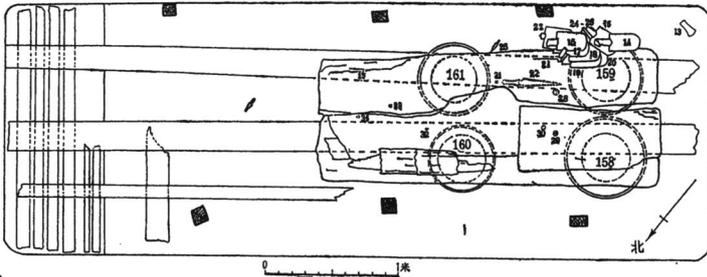
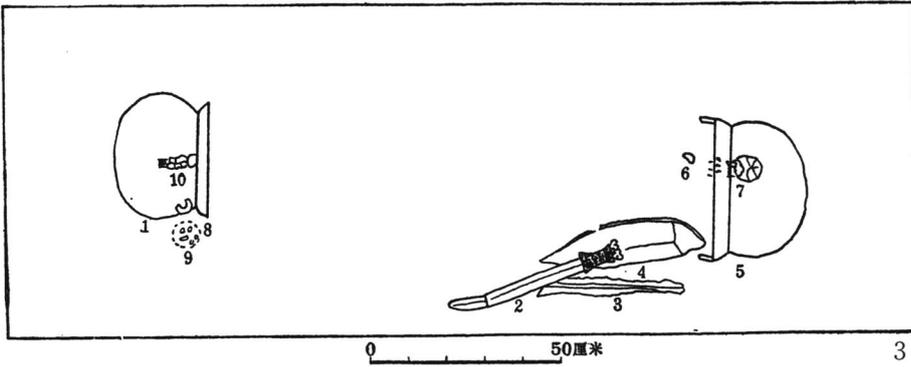
⑥ 雲南昆明呈貢天子廟M42号墓 人頭骨と体骨を挟む形で向って右に銅釜1、左に陶尊が出土。戦国晩期。

なお調査されたうちM1、M6号墓に腰坑があった。M6号墓では腰坑内に陶罐と陶壺各1が発見された。戦国晩期とのことである。M1号墓も同時期の同じ中型土坑墓で腰坑内から陶罐がいてあったとある。

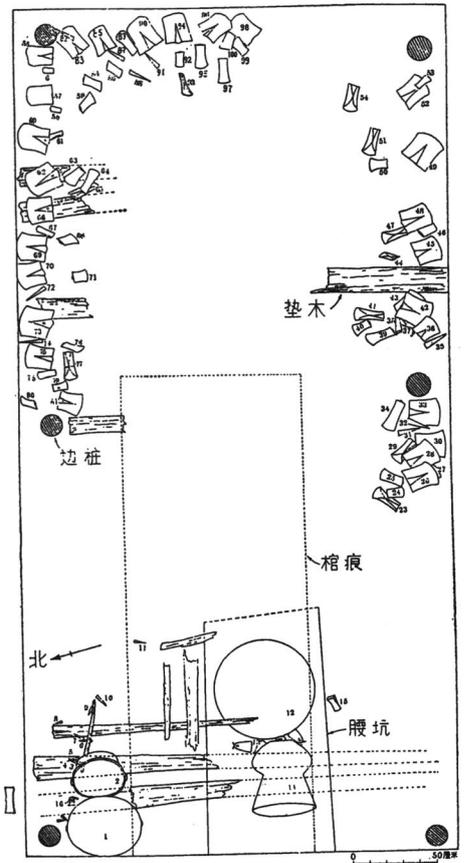
⑦ 雲南昆明羊甫頭M19号墓¹² 正方形に近い土坑内に一槨一棺がある。副葬品221件。兵器は集中して頭の両側に、棺の周囲には陶器（土器）が、装飾品の多くは墓主の身上にあって‘珠襦’であったかも知れない。銅鼓は槨室の東北端に銅釜などとあり釜の中には多数の銅甲片があった。



2a

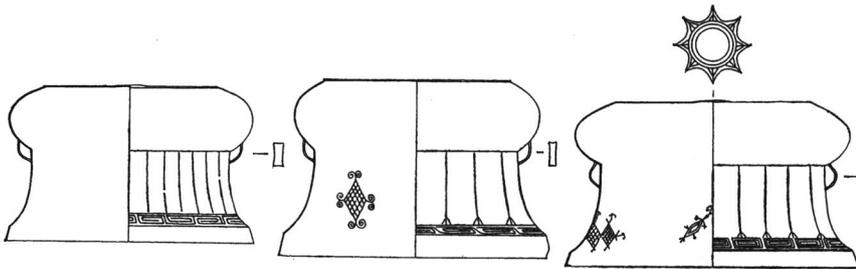


5a



5b

4



第2图 可樂と万家壩

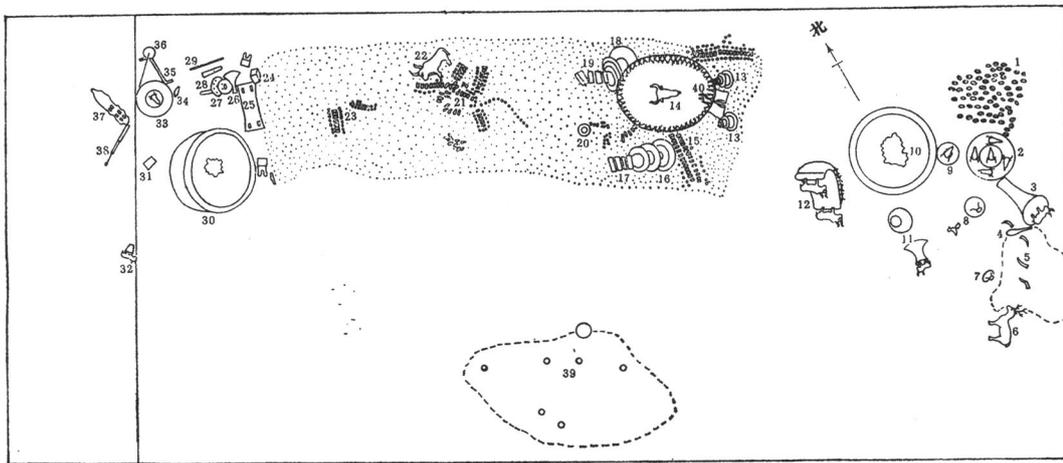
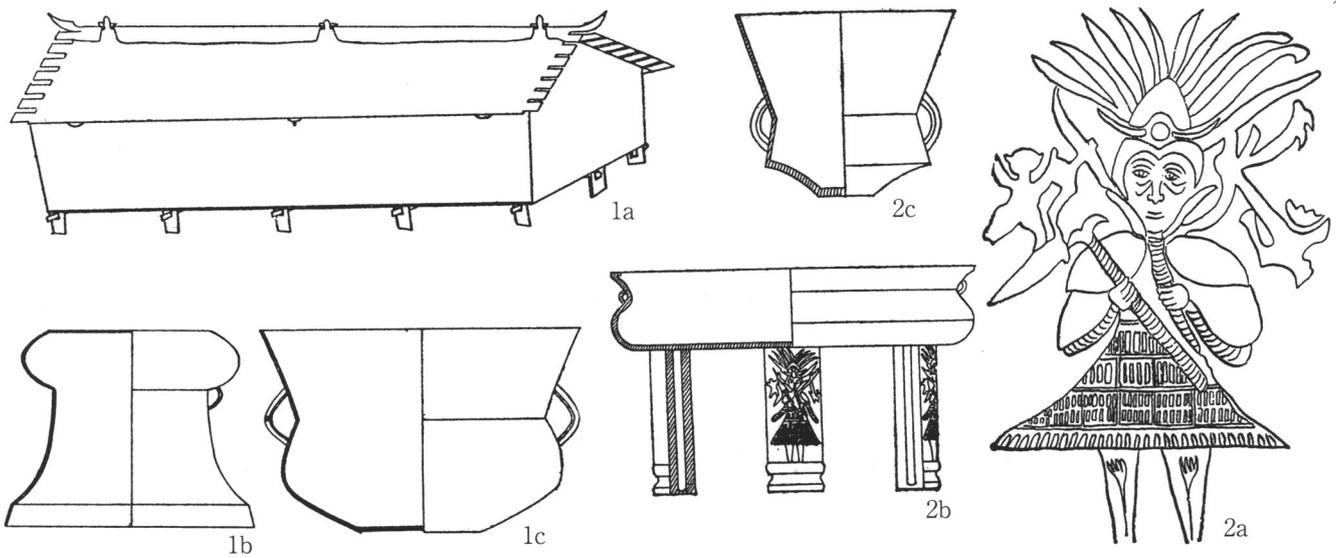
1 可樂M272

2 可樂M153

3 可樂M58

4 万家壩M1

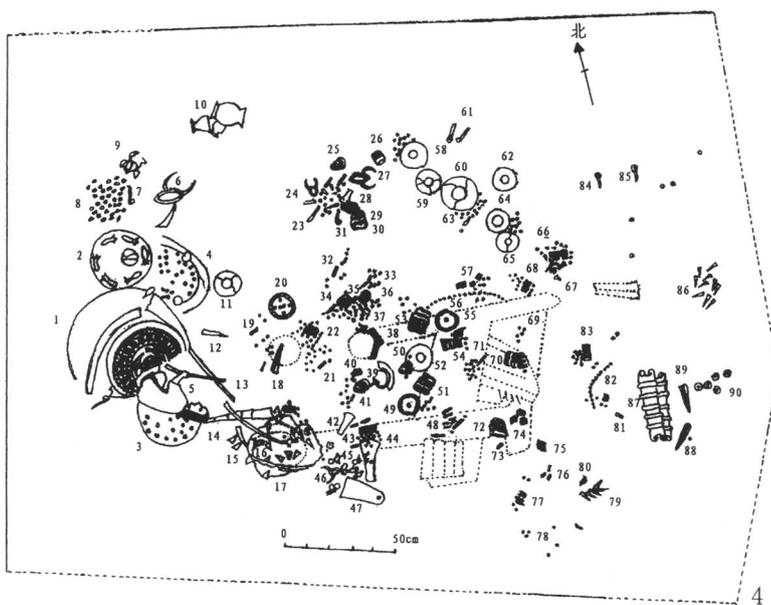
5 万家壩M23



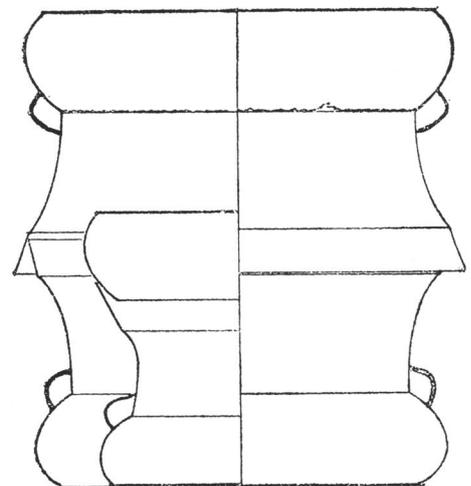
图四 17号墓平面图



2d



4



5

第3図 昆明と滇族の墓葬

- 1 大波那銅棺墓 2 天子廟M41 3 李家山M17 4 石寨山M1 5 西林銅鼓墓

榔室の東北角には一大陶瓮、内に大量の甲片。鼓は石寨山型。戦国中期前後。

羊甫頭では810座の滇族の墓葬を調査、大型墓6、中型墓27、小型墓777座を数え、小型墓は平底墓443、腰坑墓275、二層台墓32、腰坑と二層台の両方あるもの27座となる。腰坑内には基本的に器物をいれているが、なかには頭骨と肢骨の発見される場合もある。なお報告書で腰坑とあるのをそのまま認めてよいのかどうか判断を保留しておきたい。M113号墓だけ確実な例としてとりあげ後で説明する。

⑧ 雲南晋寧石寨山M16号墓¹³ 1955年以来、5次の発掘で86座を調査。竪穴土（石）坑墓で墓室の西端に銅鼓と貯貝器各1を横列、銅鼓の前に銅枕（西枕）、足もとに銅鼓1、銅尊、銅牛など。戦国後期～西漢早期、B.C.3世紀中葉からB.C.175年頃かという。

⑨ 雲南晋寧石寨山M1号墓 竪穴土坑墓、墓室の西南角（頭側か）に銅鼓1、その上に傘持ち人（執傘銅女俑）傍に貯貝器3件。墓室の南段に棺木の痕跡、人骨残片など、杖頭銅俑もある。玉耳環や金釧のぼらつきが大きく埋葬の位置不明。西枕か鏡3面出土。上限は漢文帝前元5年（B.C.175）－下限は宣帝末年（B.C.49）

⑩ 雲南晋寧石寨山M6号墓（滇王墓） 竪穴土坑墓。墓室西北角に銅鼓形貯貝器2、そのうち南側の鼓面上に傘持ち人（男俑）を置く。西南角に漆棺の痕跡（西枕）。金飾品多く、鏡1、滇王金印1、金鞘銅柄鉄劍数件。東南角（滇王の足もと側）に銅鼓（張增祺『晋寧石寨山』図7では銅鼓形貯貝器とする）1、鼓上に傘持ち人（男俑）を置く。銅編鐘1套6件を挟んで北側に銅釜2があり、その傍に人頭骨残片、その一帯に玉璧と穿孔玉片が105片散らばる。綴玉覆面と玉衣の一部か。漢のものの模倣品と思える。M6号墓には滇王の金印を持つもの以外にもう一人埋葬された人物（東枕か）がいた可能性がある。西漢中晩期

⑪ 雲南晋寧石寨山M12号墓は竪穴土坑墓で墓室西端に銅鼓及祭祀場面貯貝器1組を置く。銅鼓上に銅女俑1、武器数十件。西漢中期。被葬者はある時の滇王の可能性が有る。（西枕）

⑫ 雲南晋寧石寨山M71号墓 木榔木棺墓で西南角に傘持ち人（男俑）がある。傘蓋は脱落している。蓋周沿に小鈴がある。銅俑の南に銅鏡1ほか。西北角に貯貝器（満杯の貝）その南に両鼓を重ねた鼓形貯貝器。張增祺は西漢早期とするが、滇王墓より遅れるとする見解がある。西漢中晩期。

⑬ 雲南江川李家山M17号墓¹⁴ 石寨山から東南約40km、東に星雲湖をのぞむ。1972年27座の竪穴土坑墓を調査。木榔木棺墓。木棺の頭と足もと側に銅鼓各1を置く。銅枕があり玉耳環の前に立牛を铸つぎした銅傘蓋をおく。東枕である。戦国末～漢武帝以前。

⑭ 雲南江川李家山M21号墓 ⑬と同じあり様である。西枕の頭側棺外に牛の像のある貯貝器。その前に銅枕、棺内枕にもっとも近く銅傘蓋がある。近くに玉管、珠及び齒の破片。戦国末～武帝以前。（春秋晩期～戦国初期）

⑮ 雲南江川李家山M23号墓 李家山では唯一の合葬墓である。銅鼓が両者の中央に近い位置

の頭側、足側に各1ある。北側の被葬者は銅枕、一对の玉鐲（腕かざり）、足もとに銅傘蓋をおく。南側の被葬者は顔か頭の位置に銅傘蓋、一对の銅鐲がありともに西枕である。副葬品から女性2人が埋葬されたと言う。戦国末～西漢武帝以前。

①⑥ 雲南江川李家山M24号墓 棺の外、頭と足もと側に銅鼓各1。西枕に棺内に枕をおく。その前に立牛を蓋の頂に鋳つぎした銅傘蓋がある。報告者は傘蓋は当初から置かれていたものか、棺蓋あるいは槨蓋上にあつた可能性もあるという。男性被葬者か。戦国末～西漢武帝以前に比定されている。

李家山の先の諸例では、石寨山のように銅鼓の上に別鋳した傘持ち人を置いたものはなく、人と柄を除いた傘の蓋だけが死者の頭か顔を覆う位置から発見された。しかし1993年に出版された『中国青銅器全集』4、滇、昆明の図版五八には1992年李家山出土として銅鼓の上ののる執傘男俑（高65.6cm）が報告されている。滇族の主要な墓葬を検討したところ傘の蓋と、傘を現在持っている、いないにかかわらず執傘銅俑と呼ばれている人物像の存在が重要であることがわかった。時期を考慮してそれをならべてみると、昆明天子廟（傘なし、傘持ち人いない）→昆明羊甫頭（両者ともなし）→江川李家山（傘の蓋だけを被葬者の顔あるいは頭にかぶせる。出土状況は未報告であり、銅鼓の上ののつた傘をもつたかどうか確なところはわからないが執傘銅男俑のミニチュアがある。）→晋寧石寨山（実用の銅鼓や銅鼓形貯貝器の上に別鋳の執傘銅俑を置く。これまで11例うち男俑6、女俑5という。実際傘を伴う例は少ない。）可楽の墓葬では頭に被せられたのは銅釜だったが、滇族の墓葬でそれに相当するのは傘の蓋か執傘銅俑であるといえよう。

①⑦ 貴州赫章可楽M153号墓¹⁵ 1976年11月～1978年12月までに土着墓と呼ばれる乙類墓168座を調査した。そのうち套頭葬と名づけられた墓葬が20座を数える。なかで銅鼓を頭に被せたものが1座、銅鼓を模倣したもの（『考古学報』1986年2期の報告では銅鼓を釜に改造したものとしたが、梁太鶴は銅鼓として本来使用に耐えるものではなく、銅鼓の形を模倣したものとした。なお多くの套頭葬に使用されているものは、銅釜もしくは鉄釜である。）が2座存在する。M153号墓は長方形土坑墓で墓底の一端近くに鼓面を垂直にたてる。鼓内には頭骨が発見された。東北枕というべきか。銅鼓上面には木の朽ちたものが、墓底中部には漆皮が残っていたので漆塗りの木棺がもと使われていたかと思える。鉄刀、鉄鏃、鉄銚、銅帯鉤などが副葬されていた。西漢晩期と比定されている。（楊勇のⅢ期）

①⑧ 貴州赫章可楽M58号墓 長方形豎穴土坑墓。墓坑の両端近くに銅釜と鉄釜各1を釜口を相対するように釜を横むきに立てて置く。銅釜内からは人頭骨と歯を、鉄釜内からは脚趾骨を発見した。（東北枕）。頸には緑松石（トルコ石）の飾りが腰の左には銅柄鉄剣などがあつた。（楊勇のⅢ期）

なおM161号墓（報告では戦国晩期）出土の銅釜の北京鋼鉄学院の分析によるとCu96.6%、Sn0.76%となり紅銅器（純銅）といえる数値を得た¹⁶。貴州省文物考古研究所は2000年に可楽の調

査を行い108座の乙類墓を発掘した¹⁷。その中で5座の套頭墓葬を発見した。ただ銅鼓もしくはそれを改造した銅釜は出土していない。

⑲ 広西西林県普駄銅鼓墓葬¹⁸ 広西西部、雲貴高原の縁辺、西より東へ流れる駄娘江に面した山の傾斜面で墓葬を発見した。不規則な円形土坑（径1.5～1.7m）、深さは2m、地表下0.6mのところでは円形の板石が墓口を覆っていた。板石の下には12本の石棒が置かれておりその下から銅鼓があらわれた。銅鼓は大（石寨山型）2個、小（冷水冲型）2個があり、大銅鼓は脚部をそれぞれつき合わせる形で外槨を構成し、その内側に小銅鼓の脚部を同じくつき合わせる形で棺を構成していた。棺に相当する小銅鼓内には人骨があった。万を数える珠玉を伴っており珠襦と思える。槨と棺の間に240余件の青銅器を含む400余件の副葬品が発見された。（一部は銅鼓の外側で。）鍍金の銅騎俑や六博棋盤、4件の銅跽坐俑などは明らかに中原の漢文化の所産である。興味深いのは5件の山羊紋牌飾である。鍍金で飾板の周辺には細小の孔が片側に6ヶ所あけられている。長は13.1、幅6.5cm。別に銅製の当盧（馬の額飾り）長4.5、幅1.9cm、背面に鈕があるもの2件。被葬者は25才前後の男性と鑑定され二次葬と判断された。西漢早期墓に比定されている。

なお詳細な報告はないが、1969年にはこの銅鼓墓葬の発見された地点から20余mしか離れていない場所から銅棺墓が発見された¹⁹。『広西出土文物』によると銅面具が8件伴っており、銅棺の各角と外側の四面に貼りつけられていたものではないかという。銅棺墓の棺材はすべて鑄銅品（長200、高68、幅66cm、厚さ0.5～1.5cm）。棺も面具も鍍金である。西漢早期墓という。西林県は漢代の句町の地でこれらの墓葬は句町国²⁰の統治者の可能性があるという。

⑳ 広西百色龍川²¹ 1977年9月に発見された時、銅鼓の鼓面は地表に露出し鼓の足下に扁平な石塊を置いてあった。石塊上に人骨は置かれ二次葬に属するという。銅鼓は石寨山類型で腰部は羽状紋で8区格にしきられ、うち4格は空白、4格は牛紋である。

㉑ 広西田東祥周²² 鍋蓋山頂と山の斜面より戦国晩期墓が2座発見された。M1号墓は嶺頂にあり封土をもとは有していた。墓坑不明、葬具なし、人肢骨残欠。銅器8件は発見者によると東西に一列に並んでいた。銅鼓は現状では耳がなく腰以下がない。面径23、残高11.5cm。石寨山型である。他には銅剣2、銅矛1、銅戈1、銅鐏1、銅斧1など。もう一座から銅鼓は発見されていない。

㉒ 広西田東県祥周郷南哈波²³ 2件の銅鼓が同じ墓葬から出土した。伴出したのは銅罍1、玉管釧、玉珎など。春秋晩期あるいは戦国早期かという。万家壩型銅鼓。

㉓ 広西田東県大嶺坡²⁴ 偶然銅鼓1を発見しその次の日、同じ所で銅甬鐘1件を発見。墓葬の時期は春秋晩期あるいは戦国早期。万家壩型銅鼓。

㉔ 広西貴州羅泊湾M1号墓²⁵（M2号墓からは銅鼓の出土はない）。封土と墓道を伴う木槨墓。槨室は凸字形、12個の槨箱に分かれている。内にⅠ～Ⅲの木棺が置かれていた。盗掘によりⅡ号棺内に無字の玉印が1個あっただけで他は空。槨室底板下に7個の殉葬坑があり13才と推定され

た男性いがいは16~26才までの女性6人である。槨室頭箱の底板下、殉葬坑の北端に1mほど離れて東西横向の2個の竪穴土坑がある。報告は器物坑と呼んでいる。

西坑からは大銅鼓1が倒置された状態でいれられ、その中に銅盆、銅盤、銅杯形壺があった。銅鼓の隣には木製革鼓、東側に銅鼎、鉄釜など。

東坑からは小銅鼓があり銅鼎、盆、鐘、桶などがある。銅器だけでも192件を数える。興味深いことに槨室から1件の木牘が発見され“従器志”とあり副葬品の目録が残っていた。大畫鼓1、繪囊（絹袋にいられた）とある。槨室出土の木製革鼓を指し、銅鼓の記載はない。リストは槨室内のもののみと判断されている。

M1号墓の被葬者は南越国桂林郡の最高官吏(中原の人)。副葬品の中に戦国晩期のものも少なくないが、秦と西漢早期のものもある。西漢中期以後のものはない。上限は秦末、下限は文帝、景帝の時期より遅れないだろう。嶺南地区で言えば趙佗が王を称した南越国の時期に相当するのではないかと推測されている。

なお雲南省からは近年墓葬から出土した銅鼓として①楚雄大海波鼓、②曲靖八塔台鼓、③昆明官渡鼓のいずれも各1をあげているが詳細が明らかでない²⁶ので記録にとどめた。

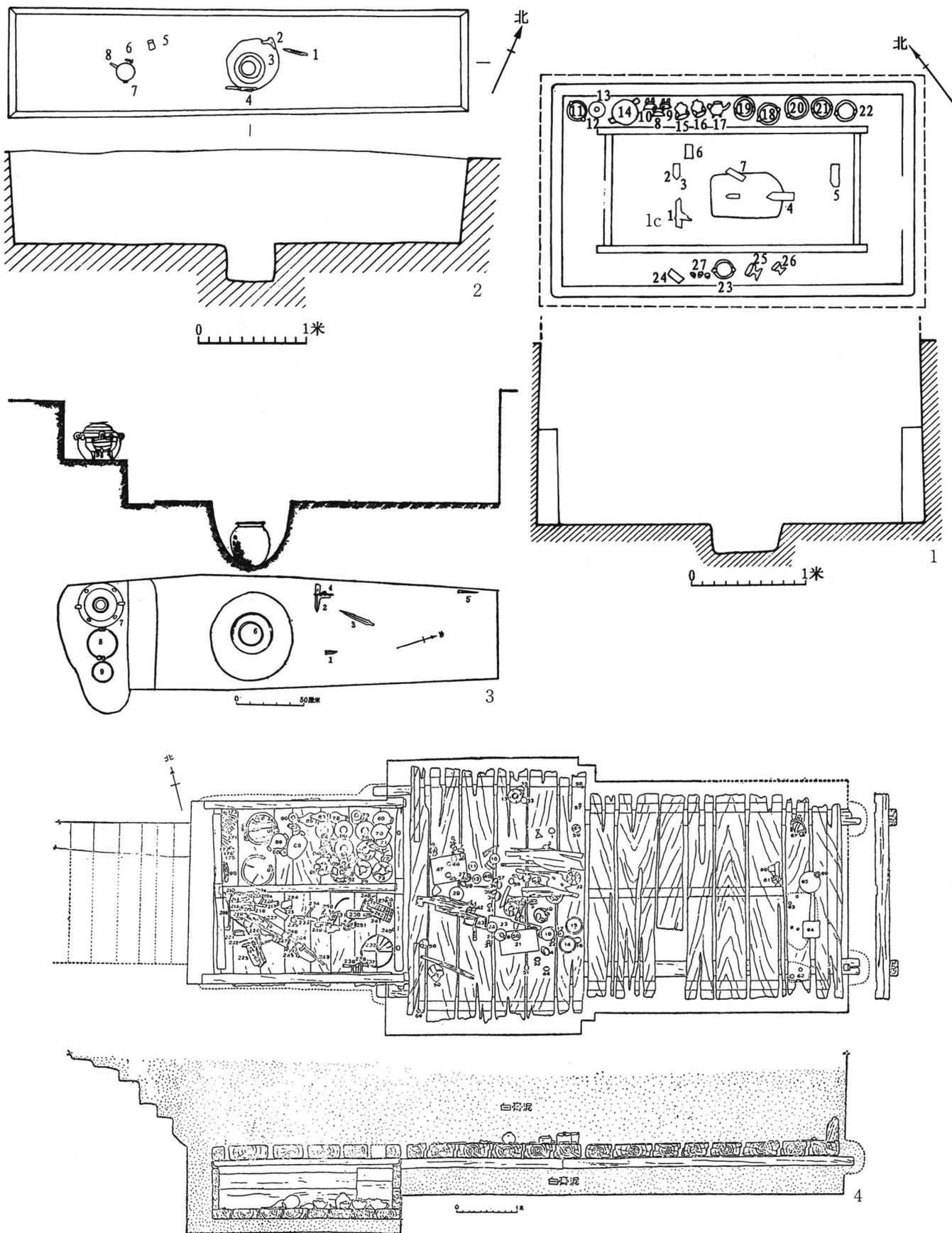
以上銅鼓の墓葬での取り扱い方について、関係資料の関係ありと判断したところを要約したが、関心をもった点についてデータを集め検討する。

3 腰坑の三種類 (第4図・第5図)

滇西の楚雄万家壩M1号墓では銅鼓は銅釜などと腰坑内にいれられていた。M23号墓の槨底板下に並べて置かれた銅鼓群もそれに準ずる扱いと考える。広西貴州羅泊湾M1号墓では殉葬坑の前方、頭箱の槨板下に、器物坑が左右ともに地下室として設けられていた。

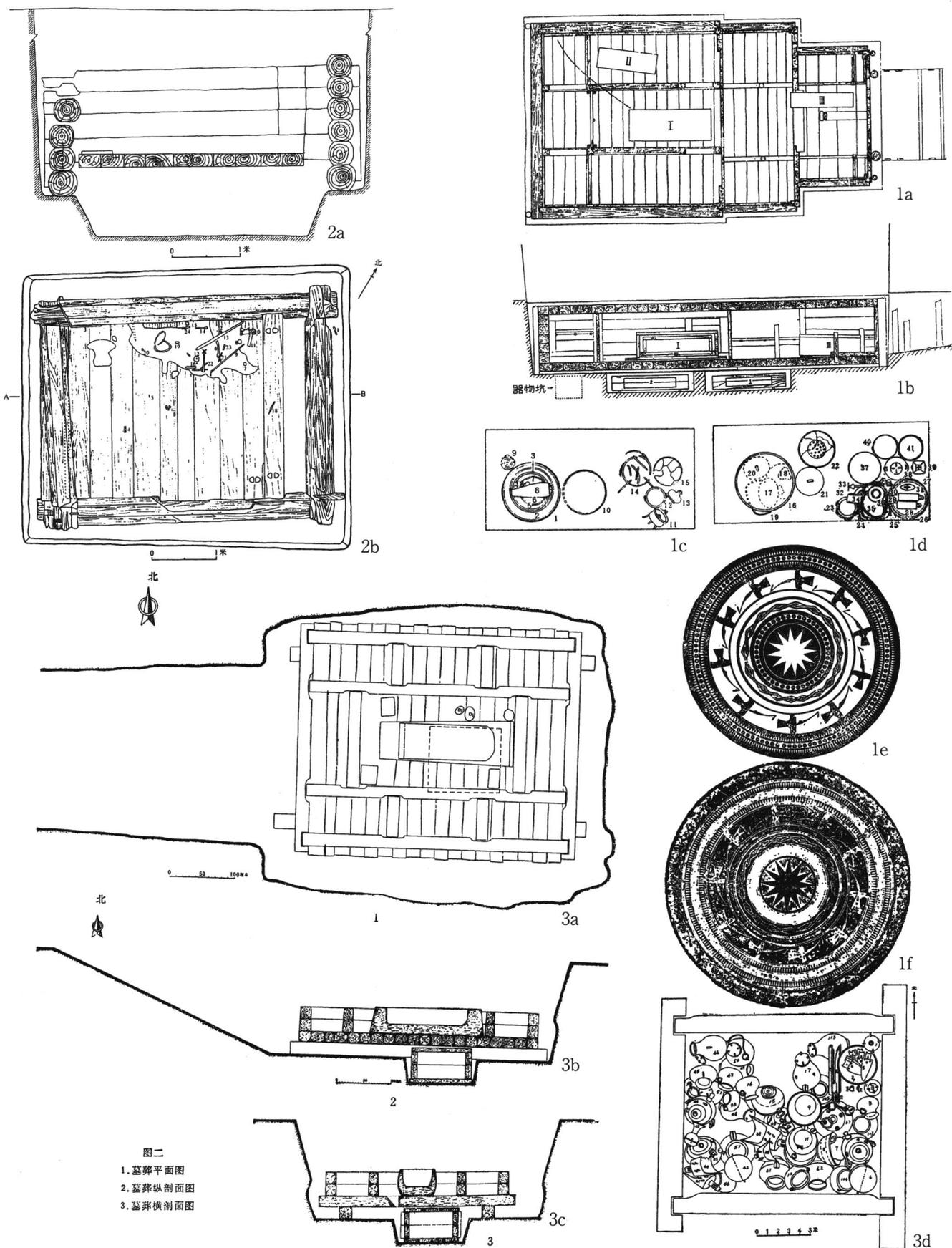
腰坑は商(殷)人によって考えだされた墓葬の構造の一つで、被葬者の棺や槨を設けるに先立って坑を中心部に掘り狗をいれる。目的は墓の使用に対する土地神への魂鎮め=奠基=地鎮にあったといわれる。ただ一つにきめつける必要はない。魔よけの意味や烏丸の葬儀で犬が死者を赤山へ導く(『後漢書』烏桓鮮卑列伝)ように死後の靈魂を導くなどの働きをかねていたとも考えられよう。腰坑をもつ墓を営む集団とそうでない集団が存在する。腰坑の風習をもつ昆明族や滇族、もたない夜郎(貴州可楽)の集団や句町国(広西西林)の集団の存在は、西南中国や南中国の夷族の人達が影響をどこから受けたのかという問題を提示している。腰坑を少し広い目でみてみよう。

商の腰坑 二里頭Ⅲ期に出現した²⁷とされるが正確かどうか保留しておきたい。腰坑は基本的に商代墓葬の顕著な特徴の一つである。被葬者の棺や身体の下に長方形(円形、楕円形)の土坑を掘り坑内に多くは殉狗1をいれる。殷墟の侯家莊大墓などでは殉人を伴う場合もある。早商期の腰



第4図 秦・越系・西漢の腰坑

- 1 宝鷄南陽M2 2 桃江M029 3 湘鄉M1 4 長沙M203



第5图 貯蔵庫としての腰坑

1 羅泊湾M1 2 羊甫頭M113 3 新都戦国墓

坑をもつ代表は湖北盤龍城李家嘴M2号墓や河南鄭州偃師商城83ⅢM1号墓などがあげられる²⁸。腰坑の有無は墓葬の規格と一定の関係があり、身分・地位の体現と思える。中商期になると腰坑は次第に増え、特に中型墓では一般にすべて腰坑をもつようになる。特に河北、山東、湖北の各墓葬中に顕著である。晩期の安陽殷墟西区では6割強まで腰坑をもつまでになる。²⁹

周の腰坑と殷遺民 殷墟の墓葬群で腰坑の使用、殉狗の実行が頂点を迎えた後、商（殷）が周に滅された後の西周時代にはどんな風に変ったかを少数例をあげて簡単に触れておきたい。西安西南方の陝西澧西では張家坡と客省庄で182座の西周墓を調査し、そのうち約1/3に当たる53座に腰坑があり、殉狗を用いているのが36座で確認された（填土内や二層台上のものも含む）。東周墓は71座調査されたうち腰坑をもつもの3座にすぎない。一方河南洛陽北窑³¹では西周早期墓116座のうち、腰坑のあるもの2座、殉狗を腰坑内にいれるものM93号墓の1座のみである。西周中期墓57座のうちでは、腰坑も殉狗もない。西周晩期墓では34座で腰坑のあるものなし。棺内に殉狗2座。時期不明墓141座のうち腰坑あるもの2座、腰坑あっても殉狗なしとの調査結果がでている。澧西の場合は、すぐ近くが文王が周原から移った豊京の地であり武王が移った鎬京とも至近の距離である。

周の支配の基本は殷の遺民（頑民）を王都の周辺に住まわせることや中原各地の主要地域に血族の有力者を封じて彼等に殷民をわけ与え、それぞれの風習を重んじつつ統制・支配させることであった。澧西の腰坑・殉狗を伴う墓は殷系の人々のものであろう。また殷の中でも有力者は殷（商）の行く先を見定めた後、周に服した例もある。周原から出土した史牆盤の銘に明らかのように、史の微の先祖は周原にいた武王に服属し、武王は周公に命じて微の先祖に対し周原内に采邑を与えさせた。武王以来、当代の恭王まで6代にわたって微の一族は周に仕えたことが銘記³²されている。彼等殷の遺民たちの中でも河南省で発見された長子口墓³³は殷の紂王の兄弟（異母兄とも）とも言われる微子啓（開）だと推測されている。³⁴ 墓は侯家莊の大墓と同じ亞字形の墓坑平面形を呈し、殉葬者や殉狗をいれた腰坑を伴う典型的な周初の殷系墓である。周は殷の有力者には死後も含めて彼等自身の習俗のまま暮すことを認めたことがうかがえる。澧西の早期の段階で腰坑をもち殉狗を伴う殷系の墓葬が多いことは、王都の近くで周人と移された殷系の人々が墓地を共有した状況を反映したものと思える。同じ王都でも東方の滅した殷墟に近い洛陽の周王城近辺の墓地では、周人と殷系の集団の墓は截然と分けられていた。報告された部分は周人の墓域の一画と思える。血族に分封された晋や燕、衛や魯では、また功臣太公望呂尚の封じられた齊ではそれぞれ殷系の人々の扱いの違いが墓域の中での腰坑や殉狗のあり様のちがいと対応していると考えられる。

春秋戦国時代ではどうか。巴蜀さらに西南中国や嶺南の百越の世界に影響を与えることの多かった秦と楚を中心に検討してみよう。

秦の腰坑 まず西周の地の跡を襲った秦の春秋戦国時代の墓葬の構造とくに腰坑のあり方はど

うか。秦では春秋早中期に比定される墓葬に腰坑の設けられているものがいくつか知られる。

① 甘肅靈台景家莊春秋墓³⁵ではM1号墓に腰坑があり坑内には殉狗がいるとある。

② 陝西長武上孟村秦国墓葬³⁶ではM27号墓に腰坑と殉狗がある。28座のうち長方形豎穴土坑墓で最大の中型墓、棺の四角に近い場所に銅鈴があった。

③ 陝西鳳翔八旗屯秦国墓葬³⁷ 調査した40座のうち腰坑あるもの2例である。いずれも長方形豎穴墓でBM32号墓は殉狗1が、BM9号墓からは坑だけで何もみつからなかった。報告では各墓葬ごとの年代比定はない。春秋早中期という比定は滕によった。②と③について②の報告ではともに春秋晩期～戦国早期となっているが、ここでは滕銘予³⁸の見解によった。

④ 陝西宝鷄南陽村春秋秦墓³⁹ 4座のうちM2とM3号墓に腰坑があり殉狗各1を伴う。M1とM4号墓は破壊がひどかった。年代は春秋早期と結論づけられている。

⑤ 陝西宝鷄陽平鎮秦家溝村秦墓⁴⁰では5座の墓葬が調査されM1号墓とM2号墓では熟土二層台の下にそれぞれ殉狗が1あったが腰坑はない。春秋期かといわれている。

以上のように秦墓の場合、腰坑をもつ例は春秋早中期にはみられるものの春秋晩期から戦国期にかけては少なくなるのではないと思われる。滕によれば靈台、長武などで腰坑と殉狗など周文化の要素が集中して出現するのは、この地区の西周時期の墓葬中、靈台白草坡、靈台鄭家窪M2号墓、寧県焦村西溝墓などで腰坑と殉狗が使用されているのと考えあわせるべきだという。秦文化が漢中に入ってきたとき、当地になお居た周の余民との接触の影響を考えるべきだという。『史記・秦本紀』に「秦の文公、兵を以て戎を伐つ。戎敗走す。是に文公は遂に周の余民を収めて之を有す。地は岐に至る。岐以東、之を周に献ず」とある。この周の余民というのが殷系の人々であったかどうかは不明であるが、滕のいう腰坑と殉狗などを「周文化の要素」というのにはひっかかる。先にもみたように殷の頑民と異なり周人は基本的に腰坑や殉狗になじまず、殉人の風も影を潜めるからである。

春秋早中期から時代は飛ぶが腰坑やそれに準ずる頭坑、脚坑、角坑と墓底より一段下に掘りこまれた坑をもつ例が多数みられるのが咸陽塔兒坡秦墓⁴¹である。長方形土坑墓や洞室墓に龕と多くはあわせてこれらの坑を伴い、そこに各種の土器をいれている。時期は戦国晩期から秦統一頃と推定され、報告者によれば咸陽の土着居民ではないという。どこからきたのかについては非土着居民というだけで出自について論究せず、副葬品が土器しかないので平民の墓だといっている。秦文化が専門という滕銘予は一部の仿銅陶礼器をもつグループは三晋両周地区と共通ではあるがいずれにしろ不同人群の集合体（不同来源の人群）としかいいようがないとの結論である。墓の構造と壁龕や腰坑及びそれに相当する頭坑、脚坑、角坑の中に土器をいれているという在り方は楚人（楚人に征服された越人というべきか）の墓葬と共通するものをもっていると筆者は判断する。秦に西の方からつぎつぎと攻めこまれ、楚は首都江陵の郢都をすて、陳へ遷り、さらに寿県へ遷ることになる。いつかその間の時点で楚から首都咸陽への造都工事に強制連行された楚人を

中心とする墓葬群ではないだろうか。

楚の腰坑 秦と対立していた楚の春秋戦国時代の腰坑のあり方はどうであったか検討してみよう。楚では江陵に代表される湖北と長沙を中心とする湖南とにわけて考えるべきだと思う。江陵九店東周墓では597座が調査されそのうち3座が腰坑をもち殉狗各1が納められていた。春秋中期までの姫姓の周系墓だという。⁴² 他には棺底板下から殉狗1のものが1座、竹筒内のものが1座でこれらはいずれも春秋晩期以降の楚系墓だという。戦国時代に入ると中期に比定されている河南信陽長台関M1号楚墓⁴³では腰坑内に小鹿が1頭入れられていた。戦国中期の江陵包山M2号墓⁴⁴（下葬年代B.C.316年、墓主左尹邵旻）では腰坑に小山羊1頭が入れられていた。狗いがいの動物が入れられる例が戦国になると楚にあらわれる。1982年に発表されたもの⁴⁵によると、江陵楚墓のうち800余座を調査した。春秋早中期は少ないがそれを含めて戦国期まで（下限は秦の白起が楚都郢を抜いたB.C.278年）の墓葬のうち腰坑のあるものは紀南城内の一画に位置する東岳廟M14号墓だけであった。腰坑内には獣牙があったが掘り進めるのは危険なので中止したとある。

陶罐をいれた腰坑 変化の大きいのは湖南である。例えば湖南桃江腰子崙⁴⁶では113座の春秋墓が発掘され、いずれも長方形堅穴土坑墓であるが腰坑をもつもの21座を明らかにした。腰坑内はなにもないか、陶罐が入っているかでなかにはM5号墓のように銅鼎と削の出土した例もある。腰坑の出現は春秋中期早段からであるが中期晩段も含めて何も入れていない。陶罐1件を腰坑に入れる風習はここでは春秋晩期早段からはじまり春秋晩期と戦国初期の交わりの頃までつづいている。腰坑内の陶罐に酒でも入れてあったものだろうか。問題は桃江腰子崙墓群は基本は越人の墓葬だという⁴⁷。楚人の勢力は春秋晩期に資水の中下流域にいたり、戦国初期になると楚人は大挙して資水流域に侵入した。楚人の勢力圏内に入る前の資水中下流域の状況を桃江腰子崙の墓群は示しているといえよう。

越人の墓葬の特色は向桃初⁴⁸によると狭長形窄坑墓、基底に河原石を敷く、壁龕をつくり副葬品の大多数を龕に入れる風習だという。腰坑内に陶罐を入れることについての意味づけはされていない。湘江流域では湘郷韶山灌区⁴⁹では19座の越人墓が調査され腰坑と頭龕を設けるものが1座あり、腰坑内には方格紋陶罐1をいれていた。春秋晩期。ただ龕にいれられた銅浴缶は典型的な楚器で被葬者は楚人統治下の越人と思われる。湘郷壩冲M2号墓⁵⁰では腰坑の中に大陶罐が入れられていた。他に祁東小米山⁵¹で春秋晩期の墓葬に腰坑を設けていたものが報告されている。郴州高山背⁵²では5座の越人墓が調査され3座が腰坑あるいは頭龕を伴っていた。資興旧市送塘⁵³では47座の春秋墓のうち腰坑（M324、遺物なし）をもつもの1座、戦国墓80座のうち腰坑をもつもの3座（M494、陶杯1、M579、小陶盃1、M485、なし）とある。

湘江流域の越人墓⁵⁴は第一期西周末～春秋早期に腰坑とか頭龕の設備は極めて少ない。第二期の春秋中晩期、腰坑、頭龕あるいは二層台の増加、副葬品に楚文化、中原文化、長江下流の徐舒文化など外来文化の要素が出現してくる。第三期の戦国期になると越人墓に腰坑は極めて少なくな

る。頭龕、二層台は比較的好く見受ける。

一方楚墓で腰坑をもつものは、汨羅山M66号⁵⁵墓1座、副葬品は陶罐1件のみ春秋晩期に比定されている。長沙では春秋早中期墓は少なく大多数が戦国墓で1957年⁵⁶と1959年⁵⁷の報告では73座と209座が調査されたが腰坑についての記載はない。楚人は春秋早中期には洞庭湖東岸地区に侵入していたが本格的に湘江流域へ侵出していなかった。戦国早期から中期にかけて軍事征服が行われ湘江流域も楚の支配下に入ったといえる。

楚人に追われた越人は南嶺をこえて広東、広西へと転回する。郴州をさらに南下すると広東樂昌市対面山⁵⁸で調査した190座の墓葬のうち腰坑をもつもの2座、うちM119号墓の腰坑は頭坑ともいうべき位置にあり、夔紋陶罐1が置かれその上に銅刮刀1件がある。他は龕をもつもの、二層台のあるものなどが目につく。時期はM119号墓だけが春秋期で他は戦国時期、腰坑はすでに退化しているとある。

湘江の延長上ともいえる広西平樂銀山嶺⁵⁹では戦国墓110座はすべて竪穴土坑墓である。10座の墓底に河原石を敷き、87座の墓底に腰坑を掘っている。79%強を占める多さである。腰坑内には土器1件をいれる。常に見うけるのは盒、三足盒、杯、罐、瓮、甌などである。そのうち盒が最多（墓によっては3件あるいは4件の例あり）、三足盒がこれにつぐ。罐は8座に瓮は5座にある。大腰坑には瓮、罐、甌をいれ小腰坑には盒とか杯をいれている。狭長形竪穴土坑墓であることは湖北、湖南の早期楚墓と類似しているが腰坑を設けることは中原殷周墓の遺俗である。墓群の年代の上限は戦国中期、下限は秦あるいは西漢初と報告者はいう。腰坑内に殉狗の痕跡はなく、1件の陶器が置かれているだけである。腰坑内に土器をいれる習俗は広西、広東で盛行し戦国時代だけでなく漢墓中でも見られる。広東徳慶、広東四会鳥旦山、広州的兩漢墓などがあげられている。⁶⁰

秦以前に嶺南は古代越族が聚居している主要な地区であった。楚の悼王（B.C.401～B.C.381）は呉起を相として迎え、呉起は戦闘之士を養い「ここに南は百越を平らげ、北は陳、蔡をあわせ三晋（韓、魏、趙）を卻け、西は秦を伐った」と『史記・孫子呉起列伝』にあるように多大の成果をおさめた。戦国早期には楚国の勢力は深く嶺南地域に入りこんでいた。

以上のことより楚の国では春秋早中期に江陵九店で認められるように腰坑をもつ墓も少数あるが、それが湖南に勢力を保持していた越系の人々に直接影響を与えたかとなると問題があるように思える。向桃初は瀉水の流域の寧郷黄材周辺で数多く発見される殷や西周初期の青銅器と近年発掘された炭河里遺跡の関係を重視し、商末周初、南に逃げた殷の遺民たちが小さな地理的区画内で当地の勢力と結合して形成された政治実体が認められる。その文化的影響は深く長く土着の越人に及んだ。春秋時期の越人の墓葬に腰坑があることもその一つだとした⁶¹。なお寧郷黄材寨子村一帯では多数の越人墓が発見されているというが腰坑や頭龕を伴うものはない。

では腰坑内へ陶罐を1件いれるということは何を意味しているのだろうか。中国から出版される

報告書は洪水のようにでるが、目を通した範囲内ではこのことについて論じたものを見受けていない。ただ小南一郎は死者の世界への橋わたしの役割を壺が果たしたと考える（小南一郎「壺型の宇宙」『東方学報』第61冊、1989年3月、小南一郎「神亭壺と東呉の文化」『東方学報』第65冊、1993年3月）。ながながと論じてきたように殷や西周の段階には腰坑の中には基本的に狗がいた。大墓になると武器をもった人間が狗と一緒に入っていた。それが楚の領域になった湖南や嶺南の百越の人々と呼ばれる集団の居住空間では春秋晩期（春秋中期に腰坑の中にはなにもいれていない場合が多い）になると腰坑の中に陶罐¹をいれる。陶罐はどんな役割を果たしたのか。「呉起、悼王に相たり南は蛮越を并せ遂に洞庭、蒼梧を有せり」（『後漢書』南蛮西南夷列伝）とある楚国の呉起の変法を採用しての越人の居住地への侵入征服はついにはB.C.306年、越国を滅ぼすまでになる。

「楚人は巫鬼を信じ淫祀を重ず」（『漢書・地理志』）性向があるといわれた。また『礼記・郊特牲』には「凡そ祭は諸れを此に慎む、魂気は天に帰し形魄は地に帰す、故に祭は諸を陰陽に求むるの義也」とあるように人の魂には陽の気の魂と陰の気の魄があり人の死後それは二つにわかると古くから観念されていたらしい。寶貝を口に含ませ再生を願った長い歴史の積み重ねをもつ中国では死後に人の身体の全きを保つことに心をくだき、また精神を代表する魂というものが魂魄に二分され、魂は昇仙し魄は地に帰すと観念された。特に戦国期の諸子百家の思想的営為が死後の世界の観念的理解を深めたものと思える。それと考古学的な墓の構造なり棺のあり様になにか観念を裏づけるようなものはあるだろうか。するとすぐ目の前にあるのは腰坑の中に納められた空の陶罐の存在である。越人の発明に彼等を征服し支配した楚人の死生に対する観念が重なった結果だとすると空の陶罐の中には地に帰すといわれたたましいの片われ魄のすまいとして用意されたものではなかろうか。連想が過ぎるといわれるかも知れないが、この春秋～秦漢期のもしかして越人が考えだした腰坑内への土器甕（陶罐、瓮など）の副葬は早くは東漢晩期に主として三国時代の呉の領域でしばしば見られ東晋永昌元年（322年）の銘をもつもの⁶²までは少なくともつづく五聯罐、神亭壺、堆塑罐、魂瓶などと呼ばれた青瓷の壺のことを思いおこさせる。少くとも東漢晩期から東晋のある時期まで浙江・江蘇・安徽の地域では塋室墓の中に副葬品と一緒に魂をいれておく土器が用意されていた。この考えをもちこむと、遺骸のま下中央の位置に設けられた腰坑の中に納められた陶罐の中には魂に関係するものをいれると楚や楚によって国を滅されたり、追い払われた越の人々は考えたのではなかろうか。

楚辞に代表される招魂や復魂の思想は、春秋戦国期に楚と越の文化的交流を背景として生みだされたものと思える。魂瓶にイメージされた天門の題辞をもつ崑崙山の造形と各位置に配された神仙像が、いつのまにか仏像の参加、あるいは仏像との交替を許し須弥山へと変貌するイメージを図形化することに成功した。あるいはイメージを表現しようとしたのは、春秋戦国期からそういった思想を育ててきた楚や越の故地であったというのも当然と諾えよう。

問題が1つある。画像石研究の権威者信立祥によれば中国古代において仙人世界という観念は従来からあるものではなくて、戦国中期にはじめて発生し西漢早期までの一時、それまでの死後の世界観が変わったにすぎない⁶³という。屈原に慣った楚の宋玉の手になるといわれる『楚辞招魂』では魂よ帰っておいで、天地四方のいずれへ行こうともそこには怪獣や魑魅魍魎がいて、魂が落ちつけるところではないのだ。帰ってくればそこには美酒や美味の世界が待っていて美人もよりどりみどりでですよといったさそいをかけている。信立祥は漢代西王母の住む仙人世界へ行きたいといった願望をもつ人はいなかった。死者にとってはそこは恐ろしい世界であったという。

彼のいう限られた時期とは戦国中期に比定されている長沙陳家大山楚墓出土の帛画⁶⁴に、墓主の女性が鳳凰に乗って仙界へ行く途中が描かれている時期に相当し、同じく戦国中期と晩期の交に比定されている長沙子彈庫楚墓⁶⁵では男性の墓主が龍舟に乗って仙界へと旅立っている。西漢早期に限ったのは長沙馬王堆M1号墓やM3号墓出土帛画の昇仙図を考慮してのことと思える。しかし何故その期間だけ昇仙のことが行われたのか、それは墓の構造の何等かと関連があるのか無いか楚墓についてももう一度検討した。

① 江陵楚墓⁶⁶の絶大多数は春秋晩期～戦国中期で早中期は極めて少ない。

② すべて土坑竪穴墓で洞室墓はない。棺槨の四周には白膏泥を用いて埋め多数のものが保存良好である。木棺は多く懸底。

③ 墓専用の漆木器を副葬する。代表は鎮墓獸、虎座飛鳥、虎座鳥架鼓。

④ 棺を麻縄で縛る。当陽趙家湖楚墓では春秋早期晩段～戦国早期晩段の墓葬にみられる。江陵では太暉觀M21、M50号墓、雨台山M263号墓など。

⑤ 江陵雨台山M166号墓では棺室と頭箱をわける隔板に窓が開けられている。戦国中期前段という。なお山東臨沂銀雀山M2号墓⁶⁷は西漢早期の木槨木棺墓で棺室と刃箱（東）をもつが、隔板の中部に両開きの小門があり、上下にとほそ枢があって開いたり閉じたりできる。江陵で門のあるものは太暉觀M50、雨台山M554、李家台M4号墓などである。なお紀南城鳳凰山秦漢墓の所見では槨室内に門や窓を設ける風習はさらに普遍的になる。一方、礼樂器、兵器、鎮墓獸は急激に減る。

⑥ 楚国殉人墓は春秋中期～戦国中期に行われた。楚国の最強の時代に当る。

以上のようなことが楚墓の墓葬の構造の特色としてあげられる。(木槨木棺の使用などは当然として)。遺骸の保存の全きを願って白膏泥を用いて棺や槨室の四周を充たしたと鎮墓獸の存在することが一番気になる。窓や門を設けることは、魂が自由にいたりきたりすることが出来るようにだろうか。

楚と越人の文化的交流が、越人に春秋中期から墓に腰坑を設け中に陶罐1をいれる風習をもたらせたと先に考えた。それは魂魄のうちの地に帰すといわれた魄のすみかとして用意されたものではないかとした。しかしそれに影響を与えたとした楚墓では魄のすみかに相当するものは何があるのかということに悩んだ。しかも魄を地に帰さしめたとみえて戦国中期～西漢初期には棺の

上に置かれた幡（非衣）に昇仙図が描かれている。その時に高崇文の‘鎮墓獸’の‘祖重’説⁶⁸を読んだ。鎮墓獸は人形のものが春秋中期～戦国晩期までみられ、人形からわかれた獸形鎮墓獸が戦国早期～戦国中晩期に盛行した。1座の墓葬にただ1個あるだけで槨内頭箱の重要な位置をしめ、銅（陶）礼器とともにあることから喪葬儀礼と関係の深いものと判断される。死者を葬る時、衣装や布で包む。親の顔、形を再び見ることが出来ないのも木を中庭に設け神をして依らしむ。この木のことを‘重’とよび、重は死者の神霊を象徴するものである。河南浙川和尚嶺M2号墓出土の鎮墓獸座に‘祖重’と解される銘があった。魂魄の魄は形（遺骸か）に附して土に入り人鬼となる。といったようなことを考慮すると楚墓の中に入れられた鎮墓獸は魄の依代でありひいては魂魄＝神と鬼の依代というべきであろうか。楚が越人の陶罐を魄のすまいとする考えに影響を与えたとしたらそれは鎮墓獸だったとしておきたい。昇仙思想は戦国中期に突然出現したものではなく、少くとも春秋中期あるいは晩期の楚墓や越墓に鎮墓獸や腰坑の中の陶罐の形であらわれていたといえるのではなかろうか。林巳奈夫は哀成叔鼎の銘⁶⁹をとりあげて死後も祖先の祭祀をこの青銅器を用いて行うとある事から、副葬された青銅器の役割は死者が生きていた時と同じようにそれらを用いて祖先を祭ることにあるとした⁷⁰。再生とはどういう事なのか。魂魄と全き肉身とが備わった時、再生はどのような形で成り立つのか。

楚や越人の墓制に対する考えや風習は、湘江という華南の大動脈を伝わって北から南へ南嶺の向うに伝わった。そこでは黄河、長江について中国を横断する第三の河川ともいえる南盤江－馱娘江－右江－邕江－郁江－潯江－西江が存在した。このルートは雲南、貴州といった西南中国と広西、広東をつなぐメインルートで銅鼓を墓に副葬し、それが腰坑に入れられているあり様はこのメインルートを利用した東西の文化交流の結果と思える。広西西林の銅棺と雲南祥雲大波那の銅棺、戦国中期の昆明呈貢天子廟M41号墓の槨蓋上の角から出土した女俑銅杖頭は墓主を形どったものか広西、広東では棺の四角に用いる人首柱形器とその出土位置に似たものがある。戦国晩期の昆明天子廟M6号墓では腰坑内に土器（陶罐と壺各1件）をいれ、同じくM1号墓でも腰坑内に陶罐1をいれていて、その風習は湖南、広東、広西に拡がる越人の世界で作られたものであり、楚人が思想的色づけをしたものではないかと考える。越人の拡がりには東海沿岸地帯を北にも向っていった。

齊の首都に近い昌楽楽家河⁷¹では春秋早期のM101号墓には腰坑はあるが何も入れない状況、戦国早期のM123号では腰坑の中に陶豆盤1が入れられていた。戦国晩期のM128号墓には腰坑はない。蓬来から近い長山列島の長島⁷²では、腰坑をもつ墓葬が7座あり、そのうち春秋晩期のM3はなにも入っていない。M5では殉狗1が戦国早期のM10、M21号墓では腰坑になにもなく、M12は殉狗1が、M17とM20号墓では陶豆盤各1があった。長島の報告書では『史記・田敬仲完世家』をひいて宣公の後をついだ息子の康公が酒や婦人に姪して政をおろそかにするので太公は康公を海上に移し、一城を食してその先祀を奉ぜせしめた。康公十四年はB.C.391年で戦国早期に相当す

る。長島のことに上の話を比定して良いかどうか確証はない。それよりも長島とか齊の首都に近い楽昌楽家河でも春秋早期の腰坑内に何もいれていない状態から、戦国早期になると陶豆盤1がいれられていたと変わる。この変化は湖南や広西、広東でみうける春秋早期から戦国末にかけての越の人々の動きと重ね合わせることが出来る。報告者とはちがって筆者はこれらの墓葬の造営に越系人の力があつたのではないかと考えている。その象徴ともいえるのが『史記・越王句踐世家』に出てくる上將軍范蠡の動きである。B.C.473年宿敵呉王夫差を敗死せしめた後、「蜚鳥盡くれば良弓は蔵され、狡兎死すれば走狗烹らる。越王は患難をともにすることは出来るが、楽しみをともにすることは出来ない」と大夫種ともがらに言ったとあるが私徒ともがらの属とともに舟に乗り海に浮んで齊に出、名を変えて産をなしその財を人々にわけ与えた。頼まれて齊の宰相にもなるがそれも棄てる。山東の陶に老死したという。越から齊へ、さらに首都から西の陶へとその動きは先の春秋～戦国にかけての越墓と共通するところのある齊墓のあり様を象徴しているようにもみえると思う。

器物坑としての腰坑 あるいは貯蔵庫ともいべき腰坑のあり方で、かつての楚の領域では西漢後期の長沙M203号墓⁷³があげられる。墓道をもつ平面十字形の木槨墓であるが、左右の前室は槨底の下に設け、腰坑の天井は槨底を使い、底も併せて四方の壁はぶ厚い木板で構築している。一個の地下室ともいべく専ら副葬品を儲蔵するために設けられた施設といえそうだ。地下構造は同じだが、ただ長方形土坑を二つ頭箱の底板下に掘って器物坑として銅鼓などを収納したのが広西貴州羅泊湾M1号墓のあり様だろう。雲南へ行くと楚雄万家壩のM1やM23号墓の腰坑のあり方も、器物坑の延長として理解すべきかも知れない。

近年発見された昆明羊甫頭M113号墓⁷⁴の腰坑の構造は長沙M203号の腰坑と底部の処置が異なるぐらいで極めて類似している。長沙M203号墓と昆明羊甫頭M113号墓を直接結ぶのに時間的空間的に開きがありすぎるというのなら、四川新都馬家公社戦国木槨墓を間にはさめば理解しやすいと思う。

新都戦国墓⁷⁵は斜坡墓道つきの長方形土坑木槨墓で棺室の中部に腰坑を設けている。まず墓底に方形の坑を掘り4個の木板を敷く。四辺は二段の木板で囲い、3個の木板で蓋をする。槨底とは5cmの空間がある。四周は青膏泥で填める。東西長1.81、南北幅1.5、深0.98m。坑内には銅器188件と木棒4節があつた。槨室は盗掘されていたが、腰坑内は無事である。銅器は5件単位をセットにするもの（鼎、壺、罍など）と2件セットのもの（敦、豆、缶、盤、甗、甗、甗、匜、勺）があつた。殉人、殉狗はない。鼎の中に「邵之儉鼎」の銘をもつものは楚器であるという。秦が蜀を滅したB.C.316年以前、紀元前4世紀前半期と推定され蜀国後期の統治者は蜀人ではなく荆楚地区からきた開明氏であるという伝説を裏づける古蜀国の蜀王の墓と思えるという。

この構造は昆明羊甫頭M113号墓の腰坑と通ずるものがある。長方形土坑のなかにつくられた木槨の東端底板に幅40cmの空間があり墓室の下と通じていた。底板を取り除くと長3.1、幅2.1、深1.3mのす掘りの腰坑があり底は竹席と松葉がぶ厚く敷かれていた。東北端から頭骨と骨格が発見さ

れた。層をなして発見された遺物は武器、儀仗器、生産工具、紡織工具、生活用具、楽器、車馬器などの青銅器や銅鉄合制器、土器類、漆木器、玉石器など各種大量の品々である。組合せからみて貴族夫妻の合葬で殉人がいたと報告はいう。西漢初年よりB.C.109年までと比定されている。

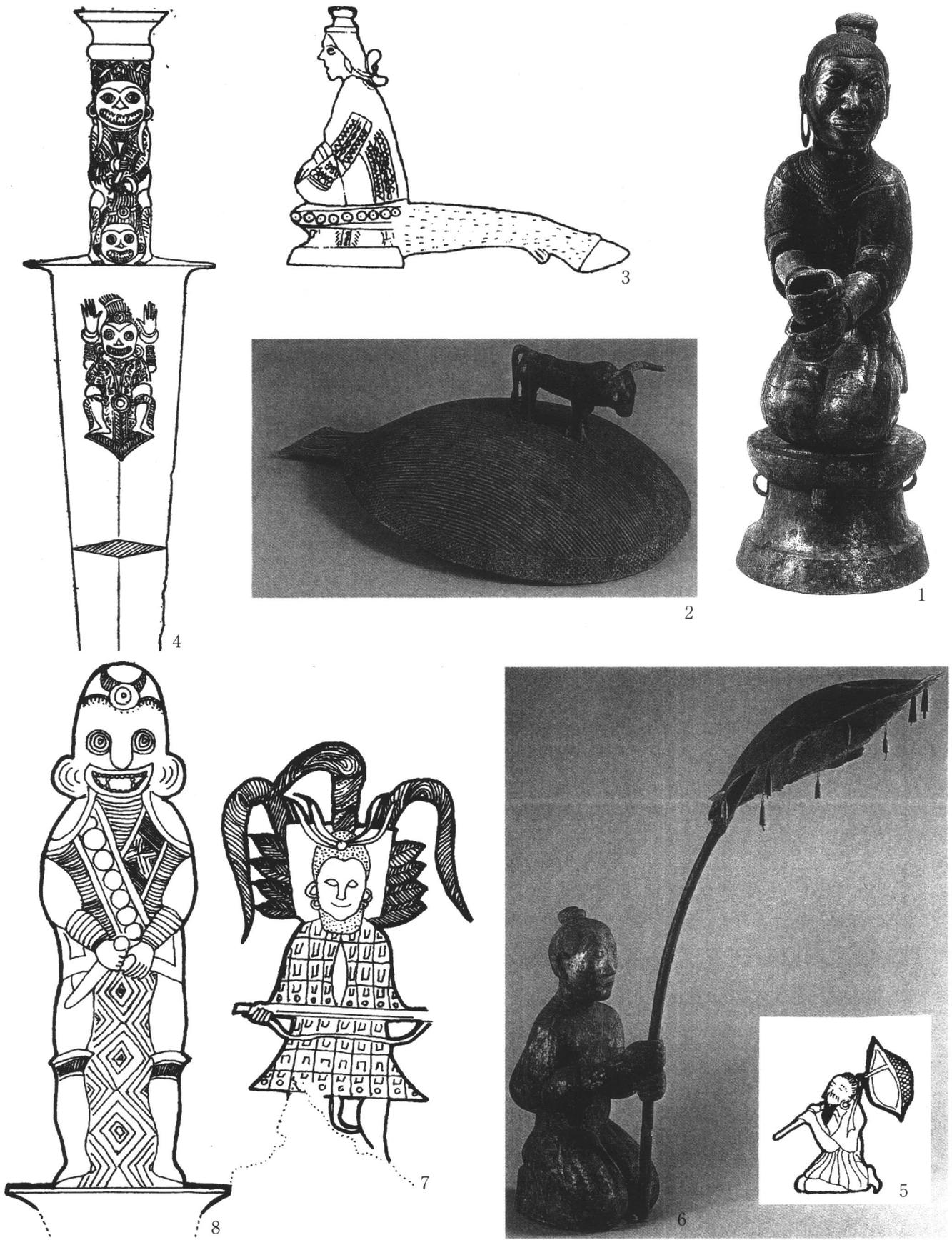
年代的には羊甫頭M113号墓は、西漢晩期に年代づけられている長沙M203号墓に近いが、構造的には蜀の新都戦国墓に似る。文化の交流が早くから昆明近辺の滇族と蜀国の人々との間にあったことを示すものかと思える。

以上腰坑というこれまであまり検討されたことのなかった春秋戦国時代の嶺南や西南中国の少数民族の墓葬の構造の面から調べてみた。巴蜀や滇、昆明の人々の考えの中に楚や越の影響の大きいこと、湖南を南下し南嶺の南で東西を流れる河川をつなぎながら伝わる文化と長江を溯り蜀に入りそこから南下する2大ルートが存在が推測される。この時、可楽で明らかになった夜郎の文化といわれるものが、中心の部分が調査された訳ではないのかも知れないが、その2大ルートから少しはずれているようなのが気になる

4 シャーマンの図像（第6図）

釜をかぶる人物について梁太鶴は張光直がかつて主張した殷周青銅器に鑄出された饗饗紋などの紋様はシャーマンの力を介助する能力をもったものだという考え方⁷⁶を援用して、銅鼓やひいてはそれと同じ扱いを受けている銅釜（鉄釜）もシャーマンの力を助けるものであり、被葬者はシャーマンだとした。そのぴったりした例が梁が論文を発表した折には未報告だったが、1999年全国考古十大新発見に選ばれ2005年に出版された雲南昆明羊甫頭M113号墓の腰坑内から出土した跪座女俑である。頭に銅鼓形の帽子（と報告はいう）を戴き両耳に大きな環をつけた女性が銅鼓の上に正座し、両手をそれぞれの膝の上に指をのぼし揃えて置いている。座っている銅鼓の後方には馬の片足、すねから下、ひづめまでが表現されている。女性は前の開いた長衣を着、下は短い横の切れた裙（スカート）をはいている。下着はVネックで四段の横紋様が漆で描かれている。髪は後を二個の饅頭形に結んでいる。同じ腰坑内から動物の頭（人、水鳥、サル、ウサギ、鹿、牛、鷹、ブタなど）を一方では形どった木祖が出土しているが、この馬の足も木祖として良いものだろうか。報告書では頭上の小銅鼓を帽子とするが、梁太鶴は可楽の墓葬例と比べて銅鼓を頭に戴いたのを表現したもので、この人物はシャーマンだとする。

鉢かづきの鉢が長谷観音の功力によって姫の身を守る。それと同じように古代中国の民族資料を文献を博捜することにより採集したW・エバーハルト⁷⁷によると釜のあるものにはシャーマンの身体を守る力があつたという事例が瑤、タイ、越の三系のうち越文化の連鎖の中で認められている。それによると「讒言にあつた呪術師が鐘をかぶせられ外から七日七晩熱せられる。この期間が過ぎた時、呪術師につけられていた従者は焼け死んでいたのに彼は無傷で現れた…。鐘の代わ



第6図 シャーマンの像

1 李家山 2 李家山 3 羊甫頭M113 4 李家山 5 石寨山M12 6 石寨山M6 7 石寨山M13 8 石寨山M7

りに釜が登場することもあるが、これはまた釜でもある（青）銅鼓に一步近い。鐘のなか同様、釜の中でも変身はなしとげられる。これと系統が同じなのは油で揚げられた物語である。偉大な呪術師達は釜の中で揚げられても平気（郴州）だが釜に蓋をすると死ぬ。…偉大なシャーマンは本当に偉大ならば釜に入れられたり、釜や鐘をかぶせられたりし、さらにその釜や鐘が熱せられても耐え抜くということである」と。

可楽の考古学的所見が、1942年に発表されたエバーハルトの研究成果を裏づけた形になったといえようか。また万家壩型銅鼓には釜として使われたとみえてお厚くススの附着したもののあることが報告されている。この点もエバーハルトの指摘したことであった。

銅鼓の副葬状態を要約しながら、可楽のように頭や顔にかぶせたものとか戴いたものはないかと注意した。結果、李家山では傘の蓋身が、石寨山では傘持ち人が同じ様な性格をもったものではないかと考えるにいたった。傘蓋と傘持ち人の出土しているのは先の2ヶ所のいずれも滇池周辺の滇族の墓葬群からだけで、同じ滇族の墓葬でも昆明周辺の呈貢天子廟や羊甫頭からは盗掘されているからかも知れないが出土例はない。祥雲大波那や楚雄万家壩の昆明族の墓葬群や広西の句町国に比定されている西林やそれ以東の地域、嶺南の越族の居住地域でもこれまで知られていない。

李家山の報告書によればM17、M18、M21～M24号墓（M21、24号は男性、M11、17、18、22、23号墓は女性）の6座から7件の傘蓋が出土した。形は同じで大小の差があり、鉄鍋を覆せて置いたのに似ている。頂面には凸起した平行線紋を鑄出し中央に円彫りの立牛を鑄つぎしている。蓋の内側周縁には十数個の小環があり、小鈴を下げられるようにしてある。さらに木柄を受けるための穿が2個あけてある。傘蓋の出土時、その下面に頭骨の一部や歯牙がたいていの場合残っている。報告では埋葬時、傘蓋は木棺の頭側の端か死者の頭部をおおっていたと推測される。石寨山の銅俑が手に持っている銅傘とよく似ているとある。

李家山の傘蓋は死者の顔にかぶせたものと判断する。可楽の銅釜（鉄釜）や銅鼓と同じ役割を傘蓋が果たしたものなら被葬者はシャーマンといえるだろうか。1992年江川李家山から銅鼓の上ののった（手にもつものは見当らない）傘持ち人のミニチュアと呼ぶべきものが発見されている。西漢とあるだけでくわしい情報はない。李家山の場合、被葬者というよりも傘蓋にシャーマニスティックな力があつたのではないだろうか。

一方、石寨山ではいくつかの墓葬で実用の銅鼓や銅鼓形貯貝器の上に、執傘銅俑という傘持ち人が置かれ被葬者に傘をさしかける状態を示していた。戦国末期から西漢中期（B.C.3世紀中葉～B.C.175年）に比定されている一類二型墓のうちM17号墓（女性、傘蓋も傘柄もいずれもない）、M18号墓（女性）、M20号墓（女性）が相当する。西汉中期の二類二型墓にはM1・M2・M3・M6・M7・M10・M12・M13・M71号墓の九墓が相当しこれらから傘持ち人8件が出土している。判明しているのはM1号墓（女性）、M6号墓（男性2）、M12号墓（女性）、M13号墓（女性）、M71号

墓（男性）である。M6号墓は滇王之印の副葬から漢武帝開西南夷以后（B.C.109年）の滇王と想定されている。そのほか規模の大、副葬品の豊富さからM12、M13、M71号墓の被葬者も（M12、M13>M6>M71）一代の滇王だった可能性があるといわれる。滇王に侍者がつくのは当然だろうから傘持ち人は単なる侍者で、傘は単なる日よけでしかないものか。可楽の釜、李家山の傘蓋と石寨山の傘持ち人のもつ傘とは別の意味をもつものだろうか。傘持ち人が銅鼓の上に乗っていることが問題ではないか。

銅鼓について張增祺は石寨山M20号墓出土の殺人祭銅鼓場面貯貝器の説明⁷⁸のなかで「三段に重ねられた銅鼓が祭儀の崇拜対象でそれは農業の神の象徴物だ」という。また銅鼓の前身は楽器ではなくて、部落の大勢の人々に食事を提供する大型炊飯器であった。楚雄万家壩から出土した銅鼓は鼓面と胴部にお厚く炊煙の跡が残っているものが多い。40～50人の1回の食事をまかなえるとなると大型炊具を崇拜する心理が生じる。雲南の少数民族は現在も‘鍋椿（支脚）’を神物とする。飯を炊くのに用いる鍋と三足架（あるいは3個の石の塊）は何人もその上をまたいでではなく甚だしい時には触れてもいけないという。古代の滇池地域の少数民族が‘鼓形釜’という炊具を崇拜したのに似ていると。そんなに神物あつかいをしていた銅鼓の上に跪座する人物とはどんな人物だろうか。

易学鐘は石寨山M12号墓出土の祭祀場面貯貝器（西漢中期）の人物群像を解釈⁷⁹し、その中で‘瞽宗’の楽師を論じシャーマンに関係すると思えることに触れている。彼によると滇王の戸^{かたしろ}と推定される男性（張增祺は女性という）が円卓に腰かける建物の西側に、銅鼓と罇^{しん}を懸けた筍^{しん}を前に地面に坐しバチで叩いて演奏している人物、その左前には長い笄を頭に飾りマントを羽織り胸に円盤形の飾りをつけた服装の特殊な女性がいる。建物の東側には地面に正座し傘をかついで天を仰ぎ哭きながら祈っているような男性がいる。いずれも眼窩は深くおちくぼみ老人の容貌をしている。傘をかつぐ人物のひげと眉はみな長い。かついだ傘状のものは特殊な形をしており墓群副葬中の銅俑の手中に多くこの傘を見る。あるいは死亡した霊をみちびく道具であろうか。演奏する者も含めて眼が一線で表現されていていずれも巫瞽のようである。中国古代の祭祀礼楽は盲人の組織が行ってきた悠久の伝統と合致する。またたいていの原始部落では一種の大型打楽器を以って集団で社（土地神）を祭り、通神の法器とした。銅鼓は‘通神’の機能と‘社鼓’の象徴でもあったという。

以上のことを考慮した時、傘もち人は単なる侍者ではなくて被葬者の霊を導く力をもったシャーマンと考えてよいのではなかろうか。シャーマンの杖というものが装束の一つとしてニオラツエのシベリアの例⁸⁰では指摘されているが、傘蓋の内側、蓋の周縁に沿い小鈴をさげられる工夫もシャーマンの持ちものとしてふさわしいように思える。また李家山の例のように傘蓋だけでも魂を導く力をもっていたといえようか。

エバーハルトによると一般にシャーマンとは鬼や精霊や靈魂や神と直接交渉をもつことがで

き、トランス、舞踊あるいはその他肉体を行使することによりこれらの存在を自分の前に呼びだしたり、体内にとりこんだり出来るもの。また呪術的に他の地域へ移動し、そこで超自然的存在と接触できる者であると定義づける。

中国のシャーマニズムの要素としてエリアーテ⁸¹は昇天、魂の呼びだしや探索、「霊」の顕現、火の制御、行者風の離れわざ、冥界下降をあげている。

考古遺物を取りあげて、これがシャーマンに関係するとかしないとかを論じても無意味かもしれないが先にあげたもの以外にどんなものが比定されているかもう少し見ておきたい。

昆明呈貢天子廟M41号墓出土の鼎の足のそれぞれ正面に羽冠を帯し身に鎧を着、片手に法具、片手に兵器をもった巫師が浮彫りで鑄出されている。両肩からは羽が生えているようだ。足元は銅鼓形に作られている。M41号墓の槨板上からは女俑銅杖頭と名づけられているものが発見された。髪を梳きながし長衣を羽織り短いスカートをはき、耳環をつけ腕輪をはめ銅鼓形の座の上に正座している。被葬者が男性か女性かは不明。この杖頭がシャーマンの杖に相当するかどうか不明である。羊甫頭M113号墓からも類似の女俑銅杖頭が出土している。

張増祺は理由を明確にしないがいくつかの舞蹈図像について巫という言葉を使う⁸²。戈舞については石寨山型銅鼓の船紋中、戈をもって躍る虎皮と豹皮をそれぞれまとい長い獣尾を後にひるがえした2人の女巫とその後方に楽器を叩き踊りを指揮する女巫と呼ぶ。

刀舞は石寨山と李家山、羊甫頭出土の銅剣に見られる。李家山の場合、剣柄には片手に刀を持ち、左手に狩った人頭をさげた歯をむきだして笑う膝を折りまげた人物が鑄出され、剣身には両手をあげうずくまり跳躍しようとする人物が鑄出されている。羊甫頭M33号墓出土銅剣にも人頭をさげた人物が鑄出されているが紋様は先の例よりも少し簡略である。羊甫頭M113号墓出土の銅削の柄にも、上下に2人の両手をあげうずくまり跳躍しようとする人物が鑄出されている。

弓矢舞は石寨山M13号墓出土銅鼓の腰部に頭に長翎を飾り頸に獣尾を飾って甲を披り弓を持つ人について先に李偉卿は巫師だとしたが、張増祺も祭祀中に術をほどこしている巫師にまちがいないという。

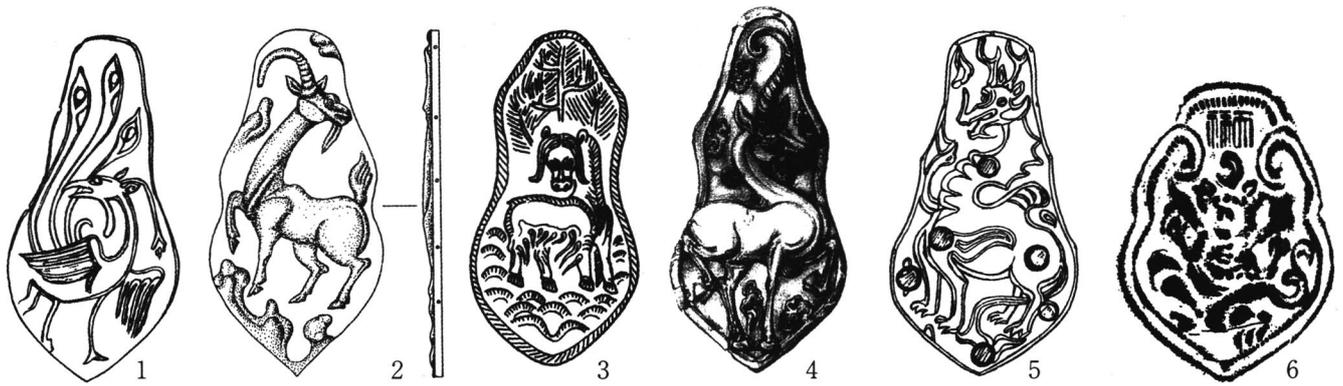
ウノ・ハルヴァ⁸³によると‘シャーマンの衣裳はそれ自身一つの仮面であり、元来仮面から由来したものと見做されるべきである’という。エリアーテは上記を引き仮面は祖先を表わしその着用者はこれらの祖先に化身すると信じられている。羽根は「シャーマンの飛翔」の象徴として最もしばしば現れるものの一つ、剣と鼓はシャーマンを特徴づける道具であるともいわれる。

西林の銅鼓のなかに葬られた人物は二次葬されたのか、万をこす珠からなる‘珠襦’にくるまれていたと推定される。梁太鶴は可楽の套頭葬されたシャーマンとは一緒にできないと否定的であるが、蔣廷瑜のいう句町国のシャーマンであった可能性も高いと以上のような諸例と民族学者や宗教学者の見方を聞く時合点できるところもありそうに思える。

5 夜郎と滇——西南夷の人々(第7図)

『史記・西南夷列伝』の冒頭に「西南夷の君長、什を以って数えるに夜郎最大なり。その西の靡莫^{ともがら}の属は什を以って数えるに滇最大なり。滇より以北、君長は什を以って数えるに邛都最大なり。此れ皆魑^{さいづちまげ}(椎)結で田を耕し邑聚を有す。その外の西では同師より以東、北は牂榆に至る、名づけて嵩^{すい}、昆明となす。みな編髮、畜に隨いて遷徙す、常の處なく君長なし、地は方数千里ばかりなり。……」とある。

貴州可楽の墓葬が調査され套頭葬という特殊な埋葬の仕方を知ることになった。いわれるように夜郎の葬制だとしたら、滇や昆明の人々の葬制にはどのような特色があるのか銅鼓の副葬状況を手がかりに検討した。農耕儀礼に伴うものといわれてきた銅鼓は、副葬の年代からみると祥雲大波那や楚雄万家壩などが古く、遊牧系といわれた昆明族の人々の中から生れたように思える。一部の人々が定住し生みだしたものなのだろうか。当初は銅釜にも使い楽器としても用いられていたものから万家壩型銅鼓が出現する。万家壩型銅鼓は煮たきするものとしても早い段階では使用されたことが、分厚いススの付着から判明する。万家壩型銅鼓の成立とあまり時をおかずに滇池周辺に住む滇族の人々によって石寨山型銅鼓が生みだされた。この銅鼓が先にのべた湖南を南北に縦断する湘江と南嶺を越えて西南中国と南中国を結ぶメインルート(南盤江-駄娘江-右江-邕江-郁江-潯江-西江)を伝わって東へと拡がった。滇族は農業を生業とするといわれ銅鼓鼓面は太陽をシンボライズした紋様が鑄出されている。このルートを伝わって楚に追われた越の人々の影響を受けながらさまざまな文化が東西相互にもたらされた。腰坑を設けその中に陶罐やそれに代わる土器を入れる風は東から西へ伝わった一例とし得る。銅鼓の副葬の風は西から東へ、また銅棺は雲南祥雲大波那と類似のものが広西西林普駄でも出土している。後者は西漢早期に比定されており前者と少し時間的開きはある。興味深いのは普駄例では銅棺の四角と四壁に飾ったと報告されている銅面具(長21.7、幅19.2、厚0.3cm)が8件ある。面具がすべて同じ顔なのかどうか報告がないので被葬者の肖像なのかどうかはわからない。これと関連するのかどうか時代と地域に開きがありすぎるので問題だといわれるかも知れないが、4~5世紀に活躍した鮮卑族の墓群のことである。遼寧北票喇嘛洞墓葬⁸⁴M5(1面)、M6(1面)、M10(3面)、M16(1面)、M17(5面)、M25(1面)号墓の棺内より出土した人面飾金具の存在である。大きさは最大のもので長13、幅8.7cm、厚さ0.7mmで一番多く出土しているM17号墓では5面ともほぼ似た顔が、3面出土しているM10号墓からは2種類の顔が識別できたとされる。当事者の肖像なのか葬送に参加した一族の代表の顔なのかはこの場合もわからない。人面飾金具が棺の内側に打ちつけられた意図は不明であるが、棺に人面飾金具をつけるという行為の類似が南北の隔たりはあっても存在することに関心もたれる。更に西南中国の文化と北方文化の共通するものとして人面金具より時間も空間も接近する例が、馬具の杏葉(漢代には珂⁸⁵とよばれた)とも当盧(馬面飾り)ともよばれているもので



第7図 北方系杏葉

- 1 石寨山M7 2 西林普駝銅鼓墓 3 ノヨン・オールM6
4 ガオルモドM20 5 楽浪王根墓 6 金嶺鎮M1

ある。以下の諸例がある（第7図）。

- 1 石寨山M7号墓 鍍金銅鳳（孔雀）紋飾板（長13.7cm）
- 2 西林普駝銅鼓墓 鍍金銅山羊紋飾板〔5件〕（長13、幅6.3、厚0.2cmと長12.5、幅6.3、厚0.2cm）
- 3 ノヨン・オール（ノイン・ウラ）M6号墓 銀ヤク紋打出飾板（他に銀鹿紋打出飾板もある由）
- 4 ^{ガオルモド}高勒毛都M20号墓 鍍金銀麒麟紋打出飾板〔6件〕（長14.7cm）
- 5 楽浪王根墓 玉装銀怪獣紋打出飾板〔12件〕（長13.28、幅7.15、厚1.0cm）
- 6 山東臨淄金嶺鎮M1号東漢墓 「天禄」銘銅怪獣紋飾板〔5件〕（長8.1、幅5.8と長4.6、幅3.3cm）

孫機はこれらの遺物のうちいくつか（1、2、3、5）について、漢代に珂とよばれた唐代の杏葉に相当するものだとした。一方、石寨山や高勒毛都のものについて報告者は当廬だとする。楽浪例を報告した榎本杜人は^{しゅう}鞞⁶⁶（孫機は鞞、しりがい）の飾りかとする。

ノヨン・オール6号墓⁸⁷はベルンシュタムによりA.D.13年、漢帝国で亡くなった匈奴の烏珠留单于の墓に比定されており、近年の調査で明らかになった高勒毛都M20号墓⁸⁸も前者の西、オルコン川を越えた地帯にある匈奴の貴族墓地中のものである。銀製の槌起による打出紋は非常に精緻で本来のものであり北方系文物に属する製品である。それに対して石寨山M7号墓は歴代の滇王を含む王墓群の中の一基であり、西林普駝銅鼓墓の被葬者も漢代句町国の王クラスの人物と推定されている。これらはともに青銅の鑄造品を鍍金したもので、オルドスの槌起の手法で作られたものをモデルにして、滇国や句町国の青銅器生産にたずさわる工人の手になるものと思える。

楽浪王根⁸⁹は楽浪郡守につぐNo2の役職にあった人物と比定されており、漢王朝を介してか匈奴

との関係の中で手に入れたか賜与されたものであろう。山東の金嶺鎮M1号墓⁹⁰の被葬者は東漢の明帝か章帝の時代の齊王劉石と比定されている。ここまできると飾板が匈奴の本来のものから漢化していることがよく理解できる。いずれにしろこの珂か当盧の出土している墓に葬られた人物は王または高級官僚といえる。本来被葬者を送る車馬の飾りのうち馬の飾りとして用いられていたものであれば、車馬を副えて墓葬を整えるほどの高い立場にあった人物に限られるのも当然といえようか。

関心は匈奴の文化、あるいはオルドスの文化がはるか西南中国の少数民族の墓の副葬品として製作手法を異にしながらも模倣して作られているその広範な文化の交流の様相であろう。雲南でも滇池や昆明周辺の滇族は農耕を主生業としたといわれる。遺跡から読みとれる実体もそうであろう。しかしさらに西方、祥雲や楚雄など洱海に近い昆明族の人々は遊牧系の人々といわれている。彼等に接している氏や羌の人々もモンゴルを中心としてB.C.3C～A.D.3Cにかけて一大勢力を築いていた匈奴と接触があり、彼等を通じて北方系文物の流入が西南中国にもあったと思える。なかには漢帝国を経由してのものも北方文化との交流を物語るものがある⁹¹が、ここでは早くに童恩正が肥沃な三ヶ月形文化圏に擬して中国東北部と中国西南部との文化の類似について半月形文化圏を提唱⁹²したが、彼の提起した事例より、よりびったりした事例の一つとして活用できるかと考える。問題は滇族のことは楚や越や蜀との関係、さらには遠く北方文物との交流まで想定されるのに対して、問題の発端となった赫章可楽で明らかになった夜郎文化の存在と他との関係はどうなのかということである。釜をかぶるという特異な墓葬の存在から周辺の滇や昆明、句町といった少数民族の墓のあり方を改めて検討するきっかけを得た。その結果、可楽の釜をかぶる人がシャーマンであるなら、滇族の人々のなかで石寨山の王墓群から主として発見される銅鼓の上に跪座する傘持ち人というのは、実は被葬者の魂を導くシャーマンではないかという考えにいたった。それぞれの少数民族特有のシャーマンの存在することが浮き彫りになったと思える。

可楽の状況を見ると銅釜の使用頻度が高く、その形は昆明族の銅釜に近い。滇族にも同じタイプの銅釜の使用は認められるがすでに少なく、銅鼓は石寨山型として万家壩型とは一線を画している。また腰坑のあり方をみても可楽の調査された土着墓には腰坑をもつものが報告されていない。可楽は夜郎の一面を占めるのは多分認められても、西南夷伝にいわれた西南夷の君長の中にあっても夜郎は最大というのにはほど遠い遺跡のあり様である。王墓クラスの墓群の調査は今後に期待される。

滇と広西や広東の百越とよばれた各種の越人との文化交流は嶺南の東西の地域を結び横断する河川ルートがありそれを利用して発展したことが明らかとなった。可楽はそのルートからはずれている。楚との文化交流にしても黔中郡よりさらに西になり、巫郡ともずれている。楚の文化は巫郡のある地点から長江北岸を伝って蜀に達したのではないか。メインルートからはずれている夜郎の文化が自大とよばれたという挿話も、これまで知られている考古遺物を客観的にながめる

時なるほどとうなずかざるを得ないところがある。さらなる成果を待ちたい。(2011年1月14日稿了)

追記 助手の頃、唐古の未発表の土器を整理して論文を書いてはどうかとお勧めをいただいた小林行雄先生に、中国の青銅器をやりたいと申し上げた時、いただいたのが岡崎敬先生の『史淵』に書かれた論文だった。今回はからずも石寨山の一端に触れられたのも両先生の御蔭と思う。拙いものを献呈させていただきたい。

注

- 1 楊 勇「試論可樂文化」『考古』2010-9
- 2 近藤喬一「中国古代に於ける鏡の副葬」-漆面罩を中心にして-『アジアの歴史と文化』第8輯、2004年3月、山口大学アジア歴史・文化研究会
- 3 市古貞次校注『御伽草子』(上)岩波文庫30-126-1
- 4 東京大学総合研究資料館『乾板に刻まれた世界』-鳥居龍蔵の見たアジア-、1991
- 5 前掲注4の曾士才「鳥居龍蔵の西南中国調査」
- 6 a. 国立民族学博物館『民族学の先覚者-鳥居龍蔵の見たアジア』1993
b. 鳥居龍蔵「人類学上より見たる西南支那」1926年8月。『鳥居龍蔵全集』第10巻、朝日新聞社、1976年5月
c. 鳥居龍蔵「苗族調査報告」1907年7月、『鳥居龍蔵全集』第11巻、朝日新聞社、1976年6月
d. 中蘭英助『鳥居龍蔵伝』-アジアを走破した人類学者、岩波書店、1995年3月
- 7 松村武雄編『支那朝鮮台湾神話伝説集』大洋社、1934年1月
- 8 a. 雲南省文物工作隊「雲南祥雲大波那木榔銅棺墓清理報告」『考古』1964-12
b. 李曉岑・韓汝玢「雲南祥雲大波那木榔銅棺墓出土銅器研究」『考古』2010-7
- 9 雲南省博物館文物工作隊ほか「雲南省楚雄県万家壩古墓群発掘簡報」『文物』1978-10
- 10 雲南省文物工作隊「楚雄万家壩古墓群発掘報告」『考古学報』1983-3
- 11 昆明市文物管理委员会「呈貢天子廟滇墓」『考古学報』1985-4
- 12 雲南省文物考古研究所ほか『昆明羊甫頭墓地』1-4、科学出版社、2005年7月
- 13 a. 張增祺『晋寧石寨山』雲南美術出版社、1998年10月
b. 中国青銅器全集編集委員会編『中国青銅器全集』第14巻 滇・昆明、文物出版社、1993年12月
- 14 a. 雲南省博物館「雲南江川李家山古墓群発掘報告」『考古学報』1975-2
b. 肖明華「論滇文化的青銅貯貝器」『考古』2004-1はM21号墓の年代を古くする。

- 15 貴州省博物館など「赫章可樂発掘報告」『考古学報』1986-2
- 16 a. 梁太鶴「赫章可樂墓地套頭葬研究」『考古』2009-12
 b. 梁太鶴「可樂套頭葬研究四題」『馮漢驥教授百年誕辰紀念文集』四川大学出版社、2001年3月
- 17 貴州省文物考古研究所『赫章可樂二〇〇〇年発掘報告』文物出版社、2008年。この報告については自分で確認していない。
- 18 a. 広西壮族自治区文物工作队「広西西林県普駄銅鼓墓葬」『文物』1978-9
 b. 蔣廷瑜「西林銅鼓墓与漢代句町国」『考古』1982-2
- 19 a. 王国榮「建国以来広西文物工作的主要收穫」『文物』1978-9
 b. 広西壮族自治区文物管理委员会『広西出土文物』文物出版社、1978
- 20 蔣前掲注18b
- 21 蔣前掲注18b
- 22 a. 広西壮族自治区文物工作队「広西田東発現戦国墓葬」『考古』1979-6
 b. 李龍章「広西右江流域戦国秦漢墓研究」『考古学報』2004-3
- 23 李昆声・黄徳榮「再論万家壩型銅鼓」『考古学報』2007-2
- 24 前掲注23
- 25 a. 広西壮族自治区文物工作队「広西貴県羅泊湾一号墓発掘簡報」『文物』1978-9
 b. 広西壮族自治区博物館『広西貴県羅泊湾漢墓』文物出版社、1988年8月
- 26 雲南省博物館「近年来雲南出土銅鼓」『考古』1981-4
- 27 中国社会科学院考古研究所『偃師二里頭』1959年~1978年考古発掘報告、中国大百科全书出版社、1999
- 28・29 中国社会科学院考古研究所『中国考古学』夏商卷、中国社会科学出版社、2003
- 30 中国科学院考古研究所『豊西発掘報告』1955-1957年陝西長安県豊西郷考古発掘資料、文物出版社、1962
- 31 洛陽市文物工作队『洛陽北窑西周墓』文物出版社、1999年4月
- 32 陝西周原考古隊『西周微氏家族青銅器群研究』文物出版社、1992年6月
- 33 河南省文物考古研究所『鹿邑太清宮長子口墓』中州古籍出版社、2000
- 34 毎日新聞2002年11月23日（土）21面に、張長寿考古研究所研究員が『呂氏春秋』に武王が微子を「長侯」に任じ殷の祭祀をとり行わせた記載があると最初に気づいたとある。
- 35 劉得禎・朱建唐「甘肅靈台景家庄春秋墓」『考古』1981-4
- 36 適安志「陝西長武上孟村秦国墓葬発掘簡報」『考古与文物』1984-3
- 37 吳鎮烽・尚志儒「陝西鳳翔八旗屯秦国墓葬発掘簡報」『文物資料丛刊』3-1980
- 38 滕銘予『秦文化』- 從封国到帝国的考古学觀察、学苑出版社、2003年1月

- 39 宝鶏市考古工作隊など「陝西宝鶏県南陽村春秋秦墓の清理」『考古』2001-7
- 40 陝西省文物管理委員会「陝西宝鶏陽平鎮秦家溝村秦墓発掘記」『考古』1965-7
- 41 咸陽市文物考古研究所『塔兒坡秦墓』三秦出版社、1998年8月
- 42 藤島志麻「周代の墓に見るイヌの意義」『古代文化』VOL.60、2009 なお九店の資料はこの論文によった。
- 43 河南省文物研究所『信陽楚墓』文物出版社、1986年3月
- 44 湖北省荊沙鐵路考古隊『包山楚墓』文物出版社、1991
- 45 郭徳維「江陵楚墓論述」『考古学報』1982-2
- 46 益陽市文物管理处「湖南桃江腰子侖春秋墓」『考古学報』2003-4
- 47 注46に同じ。盛定国・鄭建強執筆
- 48 向桃初『湘江流域商周青銅文化研究』綫装書局、2008年7月
- 49 湖南省博物館「湖南韶山灌区湘郷東周墓清理簡報」『文物』1977-3
- 50 注49
- 51 衡陽地区文物工作隊「祁東小米山発現春秋銅器」『湖南考古輯刊』第2集、1984年
- 52 郴州地区文物工作隊「湖南郴州東周墓発掘報」『文物』1990-10
- 53 a. 湖南省博物館など「資興旧市春秋墓」『湖南考古輯刊』1-1982
b. 湖南省博物館「湖南資興旧市戦国墓」『考古学報』1983-1
- 54・55 注48
- 56 中国科学院考古研究所『長沙発掘報告』科学出版社、1957年
- 57 湖南省博物館「長沙楚墓」『考古学報』1959-1
- 58 広東省文物考古研究所ほか「広東楽昌市対面山東周秦漢墓」『考古』2000-6
- 59 広西壮族自治区文物工作隊「平楽銀山嶺戦国墓」『考古学報』1978-2
- 60 徐恒彬ほか「広東徳慶発現戦国墓」『文物』1973-9
- 61 注48
- 62 南京博物院・龍谷大学ほか『仏教初伝南方之路』文物図録、文物出版社、1993年6月
- 63 信立祥『中国漢代画像石の研究』1996年3月
- 64 楚文物展覧会『楚文物展覧図録』1954年
- 65 湖南省博物館「長沙子彈庫戦国木槨墓」『文物』1974-2
- 66 注45
- 67 山東省博物館「山東臨沂西漢墓発現《孫子兵法》和《孫臏兵法》等竹簡的簡報」『文物』1974-2
- 68 高崇文「楚“鎮墓獸”為“祖重”解」文物2008-9
- 69 趙振華「哀成叔鼎的銘文与年代」『文物』1981-7

- 70 林巳奈夫『殷周時代青銅器の研究』吉川弘文館、1984年
- 71 濰坊市博物館など「山東昌樂岳家河周墓」『考古学報』1990-1
- 72 烟台市文物管理委員会「山東長島王溝東周墓群」『考古学報』1993-1
- 73 注56
- 74 注12
- 75 a. 四川省博物館ほか「四川新都戦国木槨墓」『文物』1981-6
 b. 徐中舒・唐嘉弘「古代楚蜀的關係」『文物』1981-6
 c. 沈仲常「新都戦国木槨墓与楚文化」『文物』1981-6
 d. Alain Thote, “*The Archaeology of Eastern Sichuan at the End of the Bronze Age (Fifth to Third Century B.C.)*” In Robert Bagley, eds., “*Ancient Sichuan — Treasures from a Lost Civilization* —” (the Seattle Art Museum, 2001)
- 76 張光直「商周青銅器上の動物紋様」『中国青銅時代』中文大学出版社、1982年
- 77 W・エバーハルト、白鳥芳郎監訳『古代中国の地方文化』華南・華東、六興出版、1987年8月
- 78 注13 a
- 79 易学鐘「晋寧石寨山12号墓貯貝器上人物雕像考釈」『考古学報』1987-4
- 80 ニオラツエ、牧野弘一訳『シベリア諸民族のシャーマン教』生活社、1943
- 81 M・エリアーデ、堀一郎訳『シャーマニズム』—古代的エクスタシー技術、冬樹社、1974年11月
- 82 注13 a
- 83 ウノ・ハルヴァ、田中克彦訳『シャーマニズム』アルタイ系諸民族の世界像、三省堂、1971年9月
- 84 黒崎直「北票・喇嘛洞墓地出土‘人面飾金具’考」『東アジア考古学論叢』奈良文化財研究所・遼寧省文物考古研究所、2006年3月
- 85 孫機『増訂本 中国古輿服論叢』文物出版社、2001年12月
- 86 楽浪漢墓刊行会『楽浪漢墓』第二冊、石巖里第二一九号墓発掘調査報告、1975年11月
- 87 高浜秀「大興安嶺からアルタイまで」藤川繁彦編『中央ユーラシアの考古学』同成社、1999年6月
- 88 安緯・奚芷芳「蒙古匈奴貴族墓地初步研究」『考古学報』2009-1
- 89 注86
- 90 山東省文物考古研究所「山東臨淄金嶺鎮一号東漢墓」『考古学報』1999-1
- 91 近藤喬一「獅子山楚王陵出土黄金色貝帯をめぐって」『アジアの歴史と文化』第9輯、山口大学アジア歴史・文化研究会、2005年3月

92 童恩正「試論我国從東北至西南的辺地半月形文化伝播帯」『文物与考古論集』文物出版社、1987年

図出典

- 第1図 東京大学総合研究資料館『乾板に刻まれた世界』鳥居龍蔵の見たアジア、1991
- 第2図 梁太鶴「赫章可樂墓地套頭葬研究」『考古』2009-12
貴州省博物館等「赫章可樂發掘報告」『考古学報』1986-2
雲南省博物館文物工作隊ほか「雲南省楚雄県万家壩古墓群發掘簡報」『文物』1978-10、『考古学報』1983-3
- 第3図 雲南省文物工作隊「雲南祥雲大波那木榔洞棺墓清理報告」『考古』1964-12
昆明市文物管理委員会「呈貢天子廟滇墓」『考古学報』1985-4
雲南省博物館「雲南江川李家山古墓群發掘報告」『考古学報』1975-2
雲南博物館「雲南晋寧石寨山古遺址及墓葬」『考古学報』1956-1
広西壮族自治区文物工作隊「広西西林県普駄銅鼓墓葬」『文物』1978-9
- 第4図 宝鷄市考古工作隊など「陝西宝鷄県南陽村秦墓の清理」『考古』2001-7
益陽市文物管理处「湖南桃江腰子侖春秋墓」『考古学報』2003-4
湖南省博物館「湖南韶山灌区湘郷東周墓清理簡報」『文物』1977-3
中国科学院考古研究所『長沙發掘報告』1957
- 第5図 広西壮族自治区博物館『広西貴県羅泊湾漢墓』1988
雲南省文物考古研究所ほか『昆明羊甫頭墓地』1-4、2005
四川省博物館ほか「四川新都戦国木榔墓」『文物』1981-6
- 第6図 中国青銅器全集編集委員会『中国青銅器全集』第14巻 滇・昆明、1993
雲南省文物考古研究所ほか『昆明羊甫頭墓地』1-4、2005
雲南省博物館「雲南江川李家山古墓群發掘報告」『考古学報』1975-2
易学鐘「晋寧石寨山12号墓貯貝器上人物雕像考釈」『考古学報』1987-4
張増祺『晋寧石寨山』1998
- 第7図 孫機『中国古輿服論叢』増訂本、2001
安緯ほか「蒙古匈奴貴族墓地初步研究」『考古学報』2009-1
山東省文物考古研究所「山東臨淄金嶺鎮一号東漢墓」『考古学報』1999-1